

34-1

ロミンテルン二十五年史



国立公文書館	
分類	
	㊦ ㊧
配架番号	3 A
	15
	34-1

37

34-1

No.

保
外
係

輯九十二第料資察警事外

秘

WDC No. 238481 3631802

史年五十二ンルテンミコ

禁
轉
載

主要目次

緒言	四
第一章 コミンテルンの創立から第三回大會前迄	八
第二章 第三回大會から第六回大會迄	一五
第三章 第六回大會から第七回大會前迄	二五
第四章 第七回大會から獨ソ不可侵條約締結前迄	三六
第五章 獨ソ不可侵條約締結から獨ソ戰勃發前迄	四六
第六章 獨ソ戰勃發からコミンテルン解散迄	五七
第七章 コミンテルン二十五年の一考察	六七

国立公文書館

分類	50
配架番号	3 15 54

課 事 外 局 保 警
月二十年八十和昭

目次

緒言

第一章 コミンテルンの創立から第三回大會前迄

(一) コミンテルン創立大會

(二) コミンテルン第二回大會

第二章 第三回大會から第六回大會迄

(一) 新經濟政策の實施

(二) 統一戦線

(三) スターリンの獨裁

第三章 第六回大會から第七回大會前迄

(一) コミンテルン第六回大會

(二) 一國社會主義

(三) 「ソ聯邦を守れ」

(四) 各國共產黨の衰退

第四章 第七回大會から獨ソ不可侵條約締結前迄

(一) コミンテルン第七回大會

(一) 反ファツシヨ人民戦線

(二) 「民主主義」憲法の制定

(三) 反共樞軸の結成

第五章 獨ソ不可侵條約締結から獨ソ戦勃發前迄

(一) 獨ソの提携

(二) 純正人民戦線

第六章 獨ソ戦勃發からコミンテルン解散迄

(一) 獨ソの國交斷絶

(二) コミンテルンの解散

(三) コミンテルン解散の意義

第七章 コミンテルン二十五年の一考察

(一) ソ聯邦の實相

(二) コミンテルン二十五年の一考察

コミンテルン二十五年史

在哈爾濱 松下内務事務官

緒言

コミンテルンは露西亞革命成立後の大正八年（一九一九年）三月莫斯科に於て露西亞共産黨を中心として結成された。爾來今回の解散に至る迄の間、コミンテルンは世界革命の參謀本部として、全世界の共産化と其の過程としての暴力革命による全世界の資本主義社會の顛覆、プロレタリア獨裁、ソヴェート政權の樹立を目的として各國の共産黨を其の傘下に指揮して執拗な活動を展開し來つたのである。

コミンテルンの各支部中最強最大の支部は勿論全聯邦共産黨（大正十五年（一九二六年）第十四回黨大會の結果露西亞共産黨の黨名をかく改稱した）である。加之コミンテルンは實に全聯邦共産黨の指導者によつて創設されたものである。而して其の第二回大會に於て決定された規約に依ればコミンテルンの最高機關は原則として毎年一回開催される世界大會であるが、其の大會から大會に至る間の指導機關は其の執行委員會であつて、其の執行委員會の主たる事業を行ふことは大會に於て決定される執行委員會所在國の黨の任務とされたのである。かくてコミンテルン執行委員會は事實上全聯邦共産黨の左右する所となつた。蓋しコミンテルンの政策は畢竟凡ゆる點に於て全聯邦共産黨の政策の反映であ

ることは歴史的事實である。而して又ソ聯邦（大正十一年（一九二二年）第十回ソヴェート大會に於て其の組織が正式に決定された）の實權は此の全聯邦共産黨の掌握する所であることは周知の通りである。

十月革命によつて生れた露西亞ソヴェート共和國は所謂プロレタリア獨裁國である。大正七年（一九一八年）七月第五回全露西亞ソヴェート大會に於て決定された其の憲法の規定に依れば其の主權は全露西亞ソヴェート大會に在る。大會は次期大會に至る迄の間主權を行使する中央執行委員會を選挙する。而して此のソヴェート選挙に參與し得るものは勞働者、兵卒及び勤勞農民である。即ち其の政治はプロレタリア民主主義政治と言はれる。勿論、露西亞共産黨が十月革命を遂行しソヴェート政權を樹立した後に於ても社會革命黨左翼派が存在してゐた。然し社會革命黨左翼派が反革命の故を以て放逐されるや露西亞共産黨のみがソヴェート政治に參與することとなつた。即ち謂ふ所のプロレタリア民主主義政治は事實上露西亞共産黨の獨裁に他ならない。而も露西亞共産黨は大衆の意志を尊重する民主的中央集權制によつて偽裝はしてゐるが、黨の下部は上部の指令に對して絶対服従の義務を負つてゐるから事實は幹部獨裁の政黨である。幹部とは他ならぬレーニンであり後のスターリンである。即ちソヴェート政治はプロレタリア民主主義政治の名の下に其の實は共産黨の獨裁であり、黨幹部の獨裁であり、レーニン、そして後にはスターリンの獨裁政治に他ならないのである。而して實際はソヴェート政府即ち黨とは言ひ乍ら、表面は黨のソヴェート政權に對する關係は指導にあつて制度的に其の施政に關與することは避けられてゐたのである。然し此の事もスターリンの獨裁確立以後は制度上にも黨と國家とが混同されるに至つた。例へば重要國策に關する法令が概ね人民委員會議長と黨中央委員會書記長との連署の下に發布せられ、或は昭和九年（一九三四年）一月第十七回黨大會に於て國家機關の監察に當るソヴェート統制委員會が選定されたが如きである。

茲に我々はコミンテルンは全聯邦共産黨即ち黨幹部を介してソヴェート政府と一體であることを知るのである。而し

六
てコミンテルンが組織された當初、世界革命が今にも成るかと思はれた當時に於てはコミンテルンとソウエート政府との密接な關係に就ては敢て秘しようとしなかつたのである。然るに其の世界革命が失敗に終り、ソウエート露西亞が大正十年（一九二二年）新經濟政策を採用し、外、列國と修好關係を結ぶに至るや其の條約中には必ず内政の相互不干渉並に共產主義宣傳禁止條項が加へられたのである。それにも拘らずソウエート政府は其の在外公式機關をして隠密裡に革命事業に關與せしめつつ、表面は列強との衝突を恐れて政府の對外政策とコミンテルンの對外赤化運動とを嚴密に區別したのである。即ち例へば大正十三年（一九二四年）十月のジノヴィエフ書翰事件に關する英國政府の抗議に對してソ聯邦政府はコミンテルンが政府と何等關係のない事を以て應酬し、又ボロジンの支那に於ける排英運動に對して昭和二年（一九二七年）二月英國政府が抗議を提出するやソ聯邦政府はボロジンは政府の代表者でもなければ又政府に於て彼の行動に對し如何なる責任をも負ふことは出来ないと回答したのである。

要之、世界革命の參謀本部たるコミンテルンは全聯邦共產黨即ちソ聯邦の指導する所である。加之後述する如くコミンテルンは其の創立當初から既に露西亞革命の維持完成を其の本質としてゐたのであつた。従つてコミンテルンはソ聯邦の對外政策に表裏して其の戰術を決定して來たのである。さればソ聯邦が對外的脅威を感じるに伴つて愈々其の世界革命の企圖を抛棄してソ聯邦擁護の政略機關化するに至つたのは當然の成行に過ぎない。而して其の創立から今回の解散に至る迄其の當面の運動方針はソ聯邦を中心として其の内外の諸情勢に應じて變化を辿つて來た。大體之を六期に分することが出来る。

第一期は其の創立から大正十年（一九二一年）六月の第三回大會前迄である。此の時期はソ聯邦に於ける戰時共產主義時代（大正六年—一九一七年十一月から大正十年—一九二一年三月迄）に照應するものであつて世界情勢は大戦後の資本主義動搖時代とも名付くべきものであらう。コミンテルンとしては歐洲諸國に對し「直接革命的襲撃」を行つた時

代である。コミンテルン第六回大會の決議は大正十二年（一九二三年）の獨逸プロレタリアートの敗北を以て此の時期の終期としてゐるが、第三回大會に於けるコミンテルンの運動方針の轉換に從つて上記の時期を以て區分した。第六回大會決議のコミンテルン綱領も「革命的變革の第一回の企圖」を「一九一八年乃至一九二一年」としてゐる。

第二期は大正十年（一九二一年）六月の第三回大會から昭和三年（一九二八年）七月の第六回大會前迄である。此の時期はソ聯邦に於ては新經濟政策時代であつて世界情勢は資本主義の安定時代とも言へよう。コミンテルンとしては從來の戰術が勞働運動の客觀的情勢と離反してゐることから招いた失敗を認めて其の方針を轉換した。即ち「資本の攻勢」に對して大衆獲得と統一戰線戰術とを以て對抗して其の陣營を防禦すると共に他面英國に對する集中攻撃を行ひ、植民地民族運動を進展せしめて列強に對する包圍的迂迴的攻撃戰術を採つたのである。

第三期は昭和三年（一九二八年）七月の第六回大會から昭和十年（一九三五年）七月の第七回大會前迄である。前期から續いた資本主義の相對的安定時代はコミンテルン第六回大會後約一年にして終つて、世界は漸く經濟恐慌に入り不安動搖の渦中に捲き込まれた。然しながらコミンテルンは其の世界革命に極めて有利な條件に恵まれながらも、一國社會主義に基く五箇年計畫の遂行に邁進しつゝ且つ列強の干渉の幻影に憚んだソ聯邦の平和政策に追隨してプロレタリアートの祖國ソ聯邦擁護を其の政策の中心目標とし、此の爲めに帝國主義戰爭反對闘争と共に其の側面工作としての植民地闘争を敢行し、以てソ聯邦の擁護機關政略機關たることを曝露したのであつて、其の主たる世界革命の企圖に就ては聲を大にするのみで實踐は此れに伴はず殆ど之を抛棄したかの感がある。殊にナチスの政權獲得等各國に國家主義的風潮が興るに至つては尙更であつた。

第四期は昭和十年（一九三五年）七月の第七回大會から昭和十四年（一九三九年）八月の獨ソ不可侵條約締結前迄である。前期に於て勃興した國家主義風潮は益々擴大し遂には反共極軸の結成を見るに至りソ聯邦に大なる脅威を與へた

のであつた。此れに對してソ聯邦は内に於ては第二次五箇年計畫の遂行、更に續く第三次五箇年計畫の發足を以て益々其の國內態勢の強化に狂奔しつゝ、外に對しては平和政策を踏襲して自國の保全に懸命の努力を拂ふと共に、他面コミンテルンをして戰術の轉換を行はしめて反ファシヨ人民戰線戰術を採用せしめて其の擁護に資せしめたのである。然しながら此の人民戰線戰術も總て失敗するに至つた。

第五期は昭和十四年（一九三九年）八月の獨ソ提携から昭和十六年（一九四一年）六月の獨ソ戰勃發前迄である。獨ソ提携後間もなく歐洲は再び戰亂の巷と化した。ソ聯邦内に於ては益々其の高度國防國家體制の強化に邁進し、外に對しては列強の戰爭による間隙を伺いて其の赤色帝國主義の野望を現はしたのであつた。コミンテルンは戰術を修正して所謂純正人民戰線戰術を採用すると共にソ聯邦の赤色帝國主義進出に應じて漸くその攻撃的銳鋒を現はし始めたのであつた。

第六期は昭和十六年（一九四一年）六月の獨ソ戰勃發から昭和十八年（一九四三年）五月のコミンテルン解散迄である。獨ソ戰によつてソ聯邦は大戰の渦中に捲き込まれるに至つた。コミンテルンが直ちに全面的ソ聯邦擁護の側面工作に移行したことは言ふまでもない。然しソ聯邦の浮沈に關する深刻な戰の前にコミンテルンの存在自體がソ聯邦にとつて有害無益となつた。かくてコミンテルンは二十五年の生涯を閉づるに至つたのである。

第一章 コミンテルンの創立から第三回大會前迄

(一) コミンテルン創立大會

大正六年（一九一七年）十一月七日十月革命を遂行し内には地主の土地沒收、企業の勞働者管理、銀行國有、鐵道の國有及び外國貿易の國有を斷行し、外には「無併合無賠償即時講和の宣言」を發表し、次いで「舊債破棄」を宣言して

資本主義國家との共存共榮を否定したソウエト政府はブレスト、リトヴスク條約の結果獨逸との戰爭は終結したが更に國內物資の缺乏と内亂と戰はなければならなかつた。當時露西亞は第一次歐洲大戰參加と共に其の物資は次第に窮乏を告げたのであるが、殊に十月革命後聯合國の對露封鎖斷行は愈々之を加重し、剩へ聯合國の直接間接の援助による内亂は露西亞の經濟を完全に破壊した。加之此の間農民が工業製品皆無の爲め餘剩穀物を手放すことを好まなかつたことも食糧不足に可成の影響を與へたのである。かかる事情から露西亞は餘儀なく工業資本の國有、自由商業の禁止、穀物割當發給制等一聯の方策を強行して所謂戰時共產主義時代に入つて大正十年（一九二一年）三月の所謂新經濟政策採用の時迄續いた。

抑々、殆ど農業を唯一の産業とした露西亞に於ける社會運動の歴史に於て其の當初から論争された根本問題はミールそのものを基礎として社會主義社會を建設し得るや否やであつた。而して此の問題に對する理論的發展は西歐に於けるプロレタリア革命を條件として農業國たる露西亞に於てはミールがそのまゝ社會主義の基礎となり得るといふことであつた。即ち露西亞革命の成功の爲めには國際プロレタリアートの革命による救援を必要とするといふのである。レーニンは既に大正三年（一九一四年）第一次歐洲大戰勃發と同時に第三インターナショナルの崩壊を宣告し革命的な新インターナショナル樹立の必要を叫んだのであつて、其の翌年たる大正四年（一九一五年）九月五日から八日迄開かれた瑞西のチンメルワルドの會議及び其の翌年の大正五年（一九一六年）四月二十四日から三十日迄開かれた瑞西のキーンタールの會議は第三インターナショナル創立の芽生えをなした。然るに今や革命露西亞が外國の干渉と内亂とに悩み、戰時共產主義の實行による穀物割當發給制が一層農民の反ソウエト的傾向を著しからしめた事實は十月革命の成果を防衛する爲めには國際プロレタリアートの結束による救援を仰ぐ必要が切實となつた。他方、諸外國では獨逸を始めとして戰勝國の間に於てすら大戰後の社會的經濟的混亂に陥り、露西亞革命の成功に刺戟せられて革命的氣運が高潮を呈し

て、革命的な新しいインターナショナル樹立の客観的條件は熟してゐたのである。

大正八年（一九一九年）一月二十四日露西亜共産黨中央委員會及び露西亜に於ける外國共産主義者團體事務局から新
インターナショナル樹立に關する國際大會招集の招待狀が發せられた。同年三月二日から八日迄の間莫斯科で招集に應
じて參集した歐羅巴、亞米利加及び亞細亞の十九ヶ國の共産主義者によつて大會が開かれ「プロレタリア革命に關する
マルクス及びエンゲルスの學說を實現する第二インターナショナルの後継者たる「共産インターナショナル（コミンテ
ルン）」と名付けられる第三インターナショナルが創立された。本大會はレーニン、トロツキー、ジノヴィエフ、チチエ
リンによつて起草された「全世界のプロレタリアートに對するコミンテルンの宣言（所謂レーニステーズ）」を決議した。
同宣言はレーニニズムの全精神を表現したものであるが、「世界の共産黨がプロレタリア革命の最も偉大なる教父カ
ル、マルクス及びフリードリッヒ、エンゲルスの起草に係る宣言の形式で其の綱領を宣言して以來七十二年の星霜を閱
した。未だ殆ど鬪争の領域に踏み入つてゐなかつた初期に於てさへもプロレタリアートは當時既に其の中に自らの不俱
戴天の敵を適確に感得してゐたブルジョア階級による陰謀、憎悪及び迫害の中に包圍されてゐた。此の七十二年間プロ
レタリアートの發展は至難の道を通つて來た。嵐と捲き起る昂騰に次々に沈衰の時期を以てし、成功は又挫折を以て終
つた。夫れにも拘らず其の潛流は共産黨宣言に依つて豫示された道を歩み來つた。最後の決戦期は社會革命の使徒等が
豫期し且、願望した時よりも遅れて來たけれども、夫れは遂に來たのである。莫斯科に參集した我々歐羅巴、亞米利加
及び亞細亞諸國に於ける革命的プロレタリアートの代表者等は、七十二年前宣言されたかの共産黨宣言の後継者たり遂
行者たることを確信し且痛感してゐる。故に我々の使命は勞働階級の革命的經驗を結集し、日和見主義と社會愛國主義
の雜然たる混合物から運動を純化し、世界プロレタリアートの眞に革命的な凡ゆる政黨の力を糾合して、以て全世界の
共産主義革命の勝利を容易にし、促進する事にある。」と冒頭し、「萬國のプロレタリアより帝國主義的發行、君主政治

特權階級、ブルジョア國家、ブルジョア財産及び其の他總ての社會的國民的壓制の形式種類等に對する鬪争に於て固
結せよ「プロレタリアートの權力和獨裁政治確保の爲めの革命的鬪争に於て勞働者ソヴェートの旗の下に、萬國のプロ
レタリアよ、團結せよ」と結んだ。尙本大會は「コミンテルンの根本方針」を決議し、此れに附隨して「ブルジョア民
主主義とプロレタリア獨裁に關する趣意書」を決定した。然し本大會はコミンテルン創立といふこと以外には言はずは煽
動及び宣傳の觀があつたに過ぎない。因に日本共産黨は大正十年（一九二一年）第三回大會に片山潛を送つてコミンテ
ルンに加盟した。

②コミンテルン第二回大會

コミンテルン第二回大會はヴェルサイユ條約が效力を發生し同時に國際聯盟が正式に成立を遂げた（一月十日）年た
る大正九年（一九二〇年）七月十九日ペテログラードに於て開會せられ續いて同月二十三日莫斯科に移り八月七日閉會
した。丁度此の時は革命の雰圍氣が最高潮に達し、赤軍が波蘭の首都に迫りつつあつた時である。而して此の大會に於
て始めてコミンテルンは其の内容及び外觀共に武裝を擧げて世界のプロレタリア運動の前に進出したのであつた。
コミンテルンは當時の革命風潮に乗じて大衆の信頼の念を獲得し、此の大會には其の前年の二月ベルンに於て始めて
大戰後の會合を開いた第二インターナショナルの態度に懐かない社會主義團體が參加して來た。かくして革命の危機を
前にして飽く迄もプロレタリアートの革命的前衛の組織たることを堅持するコミンテルンとしてはプロレタリアートの
最も廣汎な革命大衆を獲得すると共に他面、其の組織の脆弱化防止の爲めにコミンテルン陣營内に日和見主義分子の混
入を防止する必要を感じたのである。されば此の大會に於て有名なコミンテルン加入條件二十一箇條を決議すると共に
コミンテルン規約を決定したのである。即ち「加入條件」及び「規約」はコミンテルンがそれ自體、資本主義を倒壊し、
階級を完全に排除し、共産主義社會實現の第一段階としての社會主義を實現する爲め、プロレタリアート獨裁並びに國

際的ソヴェト共和国を樹立することを目的とする單一且つ集中的な世界的政黨なることを明かにし、其の革命的戰鬥的本質を保持する爲め加入せんとする黨の一切の責任的地位にある者は共產主義者なることを嚴重に要求し、各國の共產黨に對しては其の支部として絶對的に其の統制に服すべく且つ愛國的社會主義者及び平和的社會主義者の虚欺と偽善との曝露、改良主義並に中央派との絶縁、アムステルダム、インターナショナルに對する強烈な闘争、小ブルジョア要素の黨内侵入防止、其の他各種の義務を課したのである。加之、國際的な共產主義的な労働組合運動、青年運動及び婦人運動も亦コミンテルンの統制下に服すべきものとされたのである。蓋し「プロレタリアートが政權奪取を了した時を以てブルジョアジーとの階級戦は終結するものでない。否、寧ろ反對に此の戦は特に廣汎、激烈、慘酷となるだろう。茲に於て完全に或は多少とも社會改良主義、中央派其の他の立場を主張する總ての團體、政黨及び労働運動の現役運動者は階級戦の極端に峻烈な爲め、已むを得ずしてブルジョア側、或は動搖派側に組し、或は「我々にとつて最も危険なことであるが」勝利を得たプロレタリアートの頼み難い親友になり濟ますものである。従つてプロレタリア獨裁を準備せんが爲めには、社會改良主義者及び中央派の諸傾向に反抗して激烈な戰鬥を執行しなければならないのみならず、此の戰鬥を目的に適ふ様に仕組むことが必要である。即ち改良主義、中央派等の傾向の誤れることを指摘するに止まらず、労働運動に従事してゐる人々で此等の傾向のある者は嚴格に何等假借することなく其の面皮を剥ぎつゝ進軍しなければならぬ。然らざればプロレタリアートはブルジョアジーとの最も重大な決戦を爲すに當つて、何人と共に出陣せざるべからざるかを知ることが出来ぬからである。」（「世界情勢とコミンテルンの任務に就いて」）かくて「加入條件」を原則的に拒否する黨の黨員は當然黨員から除名されることを規定したのである。

「規約」はコミンテルンの最高機關は此れに所屬する一切の黨派並に團體の世界大會であつて、此の大會は原則として毎年一回開催するべく、其の大會から次の大會に至る間の指導機關として大會は執行委員會を選挙するが、此の執行

委員會の主たる事業を行ふことは大會に於て決定した其の所在國の黨の任務であると規定した。此の事實は爾後コミンテルンの方針がコミンテルン執行委員會の所在國たる露西亞の共產黨の左右する所となり又各國共產黨に對して「加入條件」が各ソヴェト共和国に此れは現實にはソヴェト露西亞のみである一の行ふ反革命的勢力に對する闘争を援助すべき義務を課したことはコミンテルン創立の動機を端的に表明したものに外ならない。

本大會決議の「世界情勢とコミンテルンの任務に就いて」はコミンテルンの一般方策に就いて述べてゐるが尙、本大會は世界帝國主義打倒の爲め被壓迫民族の解放闘争中に潜む革命勢力を利用せんとした民族及び植民地問題に關する決議、都市プロレタリアートと農民即ち農業プロレタリアート、半プロレタリア貧農、及び小農との同盟の必要及び中農の中立化政策等を説いた農民問題に關する決議、革命的議會主義と呼ばれる議會を革命の爲に利用せんとする議會戰術を決議し、更に、労働組合を資本主義倒壊及び共產主義の爲めの意識的闘争機關たらしめる爲めに一切の大衆的労働組合内に共產黨の細胞を組織せんとする労働組合に對する戰術等を決定した。以上何れもコミンテルン活動の基本原則となつたものである。

先にも述べた如くコミンテルン創立の前後から資本主義諸國特に西歐諸國に於ては大戦後の混亂に乗じてプロレタリアートの革命意識は一層高潮を呈し「帝國主義の一切の矛盾の激化」に依つて革命的危機状態を現出したのである。而して此れに對して新しく創立されたコミンテルンは爾後露西亞革命成功の餘勢を驅つて、「最後の決戦期は社會革命の使徒等が豫期し、且願望した時よりも後れて来たけれども其れは遂に來た」（「コミンテルン宣言」）と宣言して世界プロレタリア革命に一舉に進進すべく資本主義諸國に對し、「直接革命的襲撃」を行つたのである。即ち大正八年（一九一九年）三月には獨逸の大規模な政治的總罷業（所謂三月事件）同年四月ベルリンに於けるソヴェト政府樹立、同年三月の洪牙利ソヴェト政府の樹立、翌年一月の伊太利の郵便電信従業員及び鐵道従業員の罷業同年二月佛蘭西のサンチカリ

ストの大罷業、同年三月獨逸に於ける所謂カッパ反革命に對抗した總罷業及び此れに續く革命軍の都市占領、同年九月伊太利労働者の工場占領等の發生を見た。又、此の間露西亞に於ては軍事人民代表委員トロツキーの創設した赤軍は漸次國內の反革命軍を掃蕩すると共に波蘭侵入軍を撃破して遂に首府ワルソーに肉迫するに至り、西歐革命は今や成るかの感を深からしめたのである。然し爾後赤軍は敗退を重ね大正九年（一九二〇年）十月露波戦争は失敗に歸したのであるが、西歐諸國の革命運動も何れも革命指導に當つた共產黨の勢力の微弱、其の實踐力の不足大衆の未組織等の爲めに敗退を餘儀なくされ、結局は小兒病的盲動運動に終つたのである。蓋し、世界が異常な革命的雰囲気に含まれてゐる際、何れかの國に於ける革命の成功は歐洲の赤化を容易ならしむるのみならず革命途途上内外共に多難な露西亞に對して無限の救援を與ふるものと言ふべきである。さればレーニンはコミンテルンを樹立し一階世界革命遂行に邁進したのである。

惟ふに第三回大會は革命の前衛たる黨の組織に就ては其の「加入條件」に於て嚴重な分裂主義を採り鐵の規律で武装したのであつた。此の方針は總てプロレタリア階級戦線を分裂せしめ、在來の第二インターナショナルの他に、曩に第二インターナショナルを脱退し然もコミンテルンから加入を拒まれた中央派によつて大正十年（一九二一年）二月には所謂第二半インターナショナルの成立を見たが、躊躇することなく革命に突進することを必要とした當時の諸般の事情から考察すれば此の方針は容易に理解せられることである。然しながら其の期待した革命は失敗した。のみならず大正十年（一九二一年）三月獨逸に於ける獨逸共產黨の武装暴動の失敗を轉機として各國労働者のコミンテルンに對する信頼の念を失はしめ、世界革命の波は退潮期に入つたのであるから、コミンテルンの此の分裂政策は單に其の意義を失つたのみならず、プロレタリア階級戦線を分裂せしめて打撃く「資本の攻勢」に對し極端となつたのである。即ち此の時代は革命露西亞にとつては一方に於ては西歐プロレタリアートの一聯の敗北によつて世界革命の成功によ

る國際プロレタリアートの救援の望を絶たれ、かへつてそれに續く所謂「資本の攻勢」の端緒を開いたのであり、他方に於ては外國の干渉と國內の反革命運動を克服し、プロレタリア獨裁機構―此れは周知の通り實際は共產黨獨裁であり、共產黨幹部獨裁である―とコミンテルン組織を確立したが、大正九年（一九二〇年）十月露波戦争に失敗し、更に翌年三月には共產黨の獨裁に反對したクロンシュタットの一揆を轉機として國內農民の要求に屈して戦時共產主義時代から新經濟政策に轉換を餘儀なくされたのである。コミンテルン第六回大會決議のコミンテルン綱領は「資本主義の深刻な危機の上に瀕された革命的變革の第一回の企圖（一九一八年乃至一九二一年）は一方に於てはソ聯邦プロレタリアート獨裁の勝利並に其の堅實を、他方に於ては多くの國々のプロレタリアートの敗北を齎した」と述べてゐる。

第二章 第三回大會から第六回大會前迄

（一）新經濟政策の實施

前述の如き困難な諸情勢を受けてコミンテルン第三回大會は大正十年（一九二一年）六月二十二日から七月十二日に亘つて開かれたが爾後昭和三年（一九二八年）の第六回大會に至る迄の間、ソウエト露西亞に於ては新經濟政策を採用して自國經濟の復興を圖り、他方資本主義諸國に於ては資本主義が「相對的安定時代」に入り革命運動が一時鳴を鎮めた「閑散時代」であつてコミンテルンとしては多難な時代であつたと言へよう。

先にも述べた通りソウエト露西亞に於ける戦時共產制の採用は當時の内外の情勢止むを得ざるに出でた非常手段であつた。然し當時工業は全く休止状態であつたから農民から強制的に徵發した餘剩食糧の代償として與ふべき工業製品は皆無であつた。此の事は勢ひ農民の消極的反抗を喚び起し、農業の衰退を招いた。殊に大正九年（一九二〇年）の大旱魃は二層事態を悪化させた。されば露波戦争も結末を告げ内亂も漸く終熄に近づいた當時に至つては此の政策の轉

換は必然的な歸結となつて來た。レーニンはクロンシュタットの一揆を轉機として政策を轉換した。新經濟政策（所謂レーニン、ネップ）は大正十年（一九二一年）三月第十回黨大會に於て採用された。此の政策の内容は人口の大部分を占める農民の不滿を緩和する爲めに從來の穀物割當徵稅に代ふるに現物納入の課稅を行ひ其の殘餘の農産物は農業振興の爲めに一時讓歩して重要工業を除く爾後の工業の私營を許し、又外國資本に對して企業利權を與へるといふのである。而して此の政策實施の結果は同年春の内亂の終熄と相俟つて前年の大饑饉にも拘らず國內人心の安定と産業の復活を招來し、外に對しては同年三月英露通商條約の締結を始めとして國際關係の改善を齎した。而して新經濟政策の決定には皆てプレスト・リトヴスク條約及び勞働組合問題に於て反對したトロツキはレーニンの統制に服して賛成はしたが、彼の抱懐する所謂永久革命論とは相容れないものである。彼はマルクシズムの革命理論を貫いて露西亞革命に於て政治革命から社會革命に轉化すべきことを論じ、此の轉化の過程に於て勝利を得た露西亞プロレタリアートは後進國たる露西亞の人口の大部分を占める小ブルジョアの農民層の反抗に遭遇すべく、此の反抗に對して露西亞プロレタリアートが勝利を確保する爲めには外部からの國際プロレタリアートの救援を得なければならぬ、従つて露西亞に於けるプロレタリア革命の勝利は此れに續く不斷の世界革命の援助を俟つて始めて得られると説いたのである。而して又戰時共產主義から新經濟政策への移行は明らかに「退却」であり、小ブルジョアの露西亞農民の前に屈したことであり、外國資本主義に讓歩したことである。其の結果は國內に於て都市及び農村に於ける階級分化を導き所謂ネップマン及び富農の發生を招來し、小ブルジョアの傾向の氾濫を齎した。さればコミンテルン第三回大會に於ては新經濟政策の實施に對し各國共產主義者から其れは或は資本主義の復興に他ならないとか、或は西歐諸國の資本主義を支持して革命的活動に妨害を與ふるものであるとか、各種の論難が浴せられたが此れに對してレーニンは同大會に於て新經濟政策の實施

は世界革命の發展を抑制するものではなく、世界革命が期待した如くには進行しなかつた其の當時の世界狀勢に基いて之をソヴェート國家の強化に利用した必然的措置であることを説明して革命の戰術を革命發展の歴史のジグザクの進行に適應させることの必要を明かにし、大會は此れに承認を與へた（露西亞共產黨の戰術に關する決議）。此れは即ち西歐革命企圖の失敗の結果其の救援を期待することが出来なくなつたので、國內に於ける人口の大多數を占める農民の協力の獲得によつて露西亞プロレタリアートが其の經濟的存立と政權の維持を保持すると共に、將來の革命の準備を根本的に整へんとしたものに外ならない。而して此の事は後年の一國社會主義論の萌芽を蔵するものであつてレーニンの死後一國社會主義論を繞つて大正十一年（一九二二年）四月黨書記長に就任したスクーリン對反幹部派（トロツキ、カメネフ、ジノヴィエフ等）の權力獲得鬭争時代を現出したのである。

（三）統一戰線

コミンテルン第三回大會は其の戰術を徹底的に再検討しなければならぬといふ結論に到達して其の政策を轉換した。本大會では先づ獨逸問題が論議の中心となつた。大會は獨逸に於ける革命の失敗の責は大衆から絶縁した少數の急進革命が資本主義を顛覆し得るとなす「左翼小兒病」にありとなして其の指導の失敗の責任を獨逸共產黨に負はせ、將來豫想するべき資本の攻勢に備へ、來るべき「革命の根本的準備」のために「大衆へ」のズローガンを掲げて大衆組織内に於ける日常鬭争を通じて離反してゐる大衆を獲得すべき旨を強調し、大會後の同年十二月コミンテルン執行委員會總會に於ては資本の攻勢を前にして勞働者が其の統一を懇求してゐると認め、露西亞のボルシェヴィキがメンシエヴィキに對して執つた經驗に學んで「勞働者の統一戰線と第二、第二半及びアムステルダム、インターナショナルに所屬する勞働者並にアナルコ、サンデカリズムの組織を支持する勞働者に對する態度に關するテーゼ」を採決し、翌年二月開會の第一回擴大執行委員會總會で決定した。統一戰線とは主義派等に關せず資本主義に對し自己の利害の防衛を

目的とする一切のプロレタリアートの協同を言ふのである。然しそれは決して自己の主義を捨ててゐるものではない。又それはあく迄下からの協同でなければならぬ。此の戦術は共産黨と労働大衆との接近の可能を興へ、之を機會に労働大衆に對する共産主義宣傳或は社會民主主義の變節行爲の摘發攻撃等に機會を興へ、彼等を漸次自己の陣營に導き得ると言ふのである。惟ふに暴力革命は一時之を斷念して日常闘争に移るといふのでは共産黨の眞面目を失つたと言つても過言ではない。然も戦術として前章に於て述べた分裂政策から妥協して統一戦線戦術を採用した所以のものは世界革命の實行に失敗したコミンテルンが革命の危機が既に去つた時代に大衆から黨を遊離せざらしめ、將來の資本の攻勢に對して採つた防衛措置と見ることを得よう。換言すれば、從來の正面攻撃戦術から持久的戦術へと轉換したものである。

而してコミンテルンは右の戦術に基いて其の第二回大會に於てブルジョアジーの武器であり妥協することの出来ない敵であると宣言した第二インターナショナルに對し戦線の協同を提議したが、其の結果、第二回インターナショナルの仲介によつて、大正十一年（一九二二年）四月柏林に於て三インターナショナルの代表者の會合が催された。會合は第二インターナショナルの提出した條件に對するコミンテルンの讓歩によつて一應決裂を免れ、各インテラショナルの三名の代表者から成る大會招集の準備委員會が組織されたが、五月の最初の委員會に於て決裂を以て終つた。蓋し世界革命指導の失敗を糊塗せんが爲めに自己の存在を主張しつゝ相手を利用しようとする統一戦線の提議が失敗に終るのは理の當然である。然も尙此れに懲りずにコミンテルンは伊太利に於けるファシスト権力獲得の直後開催された其の第四回大會（同年十一月五日—十二月五日）に於て統一戦線戦術を中心として論議し、其の過程として「労働者政府」のローガンを定めたのであるが、統一戦線のためには「共産主義者は社會民主主義及びアムステルダムの裏切的領袖との交渉を行ふことすら辭せない」（コミンテルンの戦術に關するテーゼ）と決議してゐる。

然し當時の國際政治情勢は「ファシズムの労働者階級に對する白色テロルの攻圍状態及びその増大する波によつて特

徴づけられる」（第四回大會決議「コミンテルンの戦術に關するテーゼ」）資本主義の逆襲を以て終始し大勢は愈々コミンテルンの不利に展開し大正十二年（一九二三年）五月には第二インターナショナルと第二回インターナショナルとの合同が成立するし、他方共産黨陣營は漸次切崩されて、遂にはコミンテルンが最も共産化に全力を傾注し、且つ同年初頭佛蘭西軍のルール占領によつて共和國成立以來の最大の危機に見舞はれた獨逸に於てすら同年十月の革命は敗北に終り、ドーゾ案の成立等世界は一層の安定期に入つた。

尙我々の注目を惹くことは第三回大會の決議に於ても見られるのであるが、第四回大會に於て「露西亞のプロレタリアは世界プロレタリアートの前に革命の前衛的闘士としての自己の義務を完全に全うした。世界プロレタリアートは最後に今後は自己の義務を果さねばならぬ。何れの國に於ても分前を奪はれ奴隸化された労働者はソウェイト露西亞に對して自己の道徳的經濟的政治的連帶性を現はすべきである。國際連帶性のみならず彼黨自身の利害は此の目的のためにブルジョアジー及び資本主義諸國に對する敢然たる闘争を始むべく彼等を鼓舞する筈である。各國に於て彼等は次の如きローガンを押し出さねばならない。即ちソウェイト露西亞から手を引くこと、ソウェイト露西亞の法律的承認、ソウェイト露西亞經濟復興に對する全面的現實的支持である。ソウェイト露西亞の凡ゆる強化は世界的ブルジョアジーの衰退を意味する」（露西亞革命に關する決議）と決議して當時國內の饑饉、帝政露西亞の舊債承認問題等困難な立場に置かれたソウェイト露西亞の救援を叫んで、コミンテルンが其の創立の目的を端的に言ひ表はしてゐることである。

因に大正十一年（一九二二年）十二月第十回ソウェイト大會は社會主義ソウェイト共和國聯邦の組織を正式に決定した。

コミンテルン第五回大會は大正十三年（一九二四年）六月十七日から七月八日に亘つて開催された。同大會は最近に於ける各國革命運動の失敗の責を夫々其の黨に負はせ、コミンテルンの陣容建直しのために各國共産黨が眞にレーニン

主義の思想を以て貫かれ、露西亞共産黨の經驗を攝取するのを適當とするとなす露ボルシェヴィキ化なるスローガンを掲げ、更に「大衆へ」の方針を世界的規模に於ける實行方策とした。(「コミンテルンの戦術に關するテーゼ」)。統一戦線のスローガンは植民地に於ては反帝國主義統一戦線の形式を採つた。然し第五回大會の陣容の建直しにも拘らず、ゴミンテルンは更に其の指導の失敗を重ねなければならなかつた。就中重要なものは支那及び英國に於ける革命の失敗である。

第一次歐洲大戰後の平和條約は民族問題を完全に解決しなかつた。而して植民地問題と關聯して民族問題が始めて提起されたのはコミンテルン第三回大會に於てであつた。大正九年(一九二〇年)夏コミンテルン指導のバクーに於ける汎アジア會議に於ては議長デノヴィエフは「若し英國より東方諸國の市場を切斷することを得ば人類の壓迫者たる英國の資本主義と帝國主義は直に滅亡する」と煽動したのである。此の問題は世界革命遂行の一戦術として既にレーニンが重視したことである。而してコミンテルンは前述の如く西歐革命に失敗するや其の背後を脅かすべく包圍的迂迴的作戰に出で、亞細亞就中當時熾頭しつゝあつた支那の國民革命運動と大正十三年(一九二四年)提携して支那の革命指導に全力を注いだ。後述の英國罷業の失敗後は殊に然りとす。此の國共提携中勞働農民運動は殆ど共産主義分子によつて指導され大正十四年(一九二五年)の五卅事件、廣東に於ける對英罷業、數次に亘る上海總罷業、廣東、湖北、湖南地方の農民運動等を激發して支那革命運動は意外に成功し、遂には英國を始め日佛米諸國を脅威するが如き状況に立ち至つた。而して昭和二年(一九二七年)五月英ソの國交は斷絶したので、同月開催のコミンテルン第八回執行委員會議はソ聯邦及び支那革命擁護を主要スローガンとして此れに主力を注いだ。然し此れもコミンテルン(中國共産黨)は國民黨の活動の爲めに利用されたのに過ぎず、國民黨の地歩鞏固を加ふるに至るや漸次蔣介石の彈壓は強化し、昭和二年(一九二七年)七月には武漢派國民黨との提携斷絶を以て國民黨と共産黨との提携は完全に斷絶した。國共分裂後、同

年八月の緊急會議の新年針に基いて中國共産黨は各地に暴動を敢行したが、同年十二月の三日天下の廣東暴動(本事件を契機として國民黨は南京國民政府の名を以て對露國交斷絶を同月十四日聲明した)を最後として敗退するに至つた。

抑々當時スターリン、ブハーリンの指導下にあつたコミンテルンは支那の國民革命運動をブルジョア民主主義革命であると同時に植民地からの國民解放運動であつて世界プロレタリア革命の一部を形成するものと觀察し、一先づ進歩的ブルジョア階級たる國民黨を援助し之を提携して國民解放を實現せんとしたのであつた。此れに對してトロツキ一派は國共提携の一時的妥協を否定し共産黨を國民黨から脱退せしめて直にソヴェト政府を組織して國民黨の勢力を奪取する方針を採るべき旨を主張し、更に國共提携は總て國民黨が漸次増大する共産黨の勢力に對して彈壓を加ふるに至るべしと豫言したのである。此のトロツキ一派の豫言は正的中したと言はなければならぬ。コミンテルンも其の第六回大會に於て中國共産黨の敗北を認めつつも其の失敗の責は中國共産黨の陳獨秀等幹部の機會主義にありとなしたのであつた。

英國に關してはコミンテルンは其の凡ゆる國際諸問題に於て演ずる役割に着目しつゝ英國を以て確實に没落過程に在るものとなし、「若し英國に於て大衆的共産黨を創り出すことに成功するならば歐洲の規模に於ける勝利の大半はそのことによつて達成されるであらう」が故に格別の注意を拂つた。即ち大正十四年(一九二五年)英ソ兩國の勞働運動の接近を圖つて英露委員會を成立せしめ、他方極力勞働黨及び勞働組合の左傾化に努めて大正十五年(一九二六年)五月大罷業を惹起したが全敗を以つ終り、英帝國の背後を脅かすべく策動した印度等英領各種植民地及び支那の民族革命も拂ふしからず、遂には昭和二年(一九二七年)五月保守黨政府によつて大正十年(一九二二年)の通商條約中の宣傳禁止條項違反を理由とする英ソ間の國交斷絶を以て酬はれたのであつた。

(四) スターリンの獨裁

以上の如く支那及び英國に於てコミンテルンが重大な失敗を重ねるや其の指導権を握つてゐたスターリンやブハーリンの幹部派に對しトロツキー、カメネフ、ジノヴィエフの反對派は國內に於ける富農的傾向の増大と合はせて攻撃を開始した。抑々コミンテルンの指導による革命の連敗に對しては各國共產黨内部に於ても不信の聲が強かつた。殊に世界の安定を認めて革命の手綱を抑制せんとし、或は兎角ソウエト露西亞の立場を中心として決定される其の方針（例へば統一戦線戦術に基く英露委員會の組織案等）に對しては左傾共產主義者は益々反對の氣勢を擧げたのである。然し此れに對してはコミンテルンは常に自己の指導の失敗を各國共產黨の責に歸したのみならず、遂に各國共產黨の反對分子を彈壓して其の指導を強化して來た。此の事情は露西亞共產黨内部に於ても同様であつた。大正十三年（一九二四年）一月二十一日レーニンの死は權力獲得闘争を生ぜしめ彼の生前既に發生してはゐたが彼の統制下に小康を得てゐた黨内對立を次第に激化せしめるに至つた。先づ新經濟政策實施による國內状況と世界革命運動の失敗とにあきたらぬトロツキーは大正十二年（一九二三年）末反對の態度を明かにしたが當時實権を握つてゐたスターリン、カメネフ、ジノヴィエフの前に敗北を重ねるに過ぎずして、大正十四年（一九二五年）一月には軍務人民代表委員の地位を剝奪された。然るに其の後同年四月の第十四回黨會議に於て可決されたスターリン提唱の一國社會主義建設及び一聯の農民政策（所謂新々經濟政策）を繞つて、其の右傾化に對しジノヴィエフ、カメネフ（新反對派）が反對した。だが露西亞共產黨の從來の名稱を全聯邦共產黨と改稱することを決定した大正十四年（一九二五年）十二月の第十四回黨大會に於てジノヴィエフ一派の敗北が確定した。

抑々社會主義建設に當面するソ聯邦の悩みは其の依然たる農業中心國たることにある。即ち社會主義建設の爲めには機械的大産業を確立し延いて農業の機械化による其の根本的改造を遂げなければならない。而してその爲めには貿易を國營とし穀物の輸出によつて國外からレーニンの所謂「工業化」の資材の輸入を仰がねばならぬ。従つて又、假令資本

主義への復歸を強めるとしても此の事は貧農のみならず事實上農民の大多數を占める中農をも其の中立法政策を放棄して或る程度讓歩しても自己の陣營に獲得すべきことが要請される。加之ソ聯邦が資本主義國家に圍繞され頼みとする世界革命が遅々として捗らない場合に於ては尙更其の建設が非常な難關に逢着することのあり得べきは看易き道理である。一國社會主義に關する論争は此の點から起つたのである。而して此の問題は又歴史的に露西亞の社會運動に於て争はれた根本問題であつたのであるが純理論からは一國に於ける社會主義國家の建設は可能であつて必しも世界革命の勝利に依る國際プロレタリアートの救援を必要としないとするは、假令プロレタリア獨裁國が資本主義制度復活に對して完全な保障を得る爲めには其の救援を必要とするに等しい。然し露西亞革命に續く西歐革命、延いては世界革命實現の望が當分見込なしとするならば、ソ聯邦のプロレタリアートは自力で其の理想を實現するより外はない。而して又コミンテルンは創立以來徒らに國費を費すのみでたゞ失敗を重ねて何等成功として認むべきものがないばかりか、ソ聯邦の對外關係を悪化せしめて國內建設を妨害したに過ぎない。將來其の純理的急進的活動が場合によつてはソ聯邦の破滅、全聯邦共產黨の没落を招くかも知れない。されば此の間の事情を熟知してゐる現實派のスターリン一派が大正十五年（一九二六年）十一月二十二日から開催されたコミンテルン第七回擴大執行委員會總會に於てコミンテルン創立以來八年間中央執行委員會議長であつたジノヴィエフのコミンテルン陣營からの離脱を決議したのも故なしとしないのである。而して此れはコミンテルンの世界革命急進派の没落に外ならない。

爾後現實派たるスターリンを盟主としジノヴィエフに代つたブハーリンによつてコミンテルンが指導されたのであるが表面激烈な革命的言辭を弄して各國共產黨を引き摺りながら其の裏面に於てはソ聯邦の利害を中心として國際情勢の現實に即した政策、言はゞコミンテルンの戦線整理を圖るのに苦心を拂つたのであつた。然も第七回擴大執行委員會總會

二四
の「國際關係とコミンテルンの使命」に關する決議に於て「コミンテルンの現下の狀態に對する國際的使命の一」とされた英國労働運動と支那革命とはコミンテルンが世界資本主義の弱點として選び其の攻撃に主力を注いだものであつて命脈の絶えんとするコミンテルンに一應は起死回生の役割を果したものの前述の如き致命的打撃を受くるや、國內に於ける軍農分子の増大及び黨の改革問題と併せて、當時既に同盟を結んでゐたトロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ等反對派の猛烈たる攻撃を煽るに至つたのである。當時ソ聯邦の國際情勢は列強の攻撃の危険すら感じて決して有利に展開してゐるとは言へないのみならず各國共產黨の陣列は著しく傾斜に傾き華々しい世界革命の夢を追ふべき客觀情勢は世界の何處にも見當らない實情にあつた。かゝる現狀ではジノヴィエフがスターリンを嘲つた如く「世界革命を懷中に藏め」資本主義諸國と表面友好關係を結んでコミンテルンの總本山たるソ聯邦の「國社會主義的建設に邁進して、一面其の經濟的自主的持久力を養つて資本主義の經濟封鎖に備へ、他面將來来るべき世界革命進出の鞏固なる據點を築きしむるを賢明の策とする。かくてスターリン一派は昭和二年（一九二七年）十二月の黨第十五回大會に於てトロツキー、ジノヴィエフ、カメネフ以下七十餘名の反對派の除名を決議し（昭和三年—一九二八年—二月開催のコミンテルン第九回執行委員會總會に於て勿論此の處置は承認された）續いて行はれた黨中央委員及び政治事務局員の選舉に於て獨占的勝利を占めると共に、ソ聯邦の對外政策たる新戰爭準備反對、國防手段の充實、資本主義諸國との平和政策等を可決し「國社會主義的建設に邁進することになつた。思ふに革命十年を祝つた其の日に革命の功勞者が新參者から革命の敵と罵倒されて黨外に放逐されたのは何とも譬へようがないが、黨書記長スターリンが同大會席上「黨といふ荷車が急に方向を變へた場合車上に落付の悪い者が轉落するのは當然である」と述べたのは確かに眞理に相違ない。遮莫、コミンテルンとしてはソ聯邦の國內事情に犠牲を強ひられて、其の一國社會主義的建設が進行するに従ひ愈々困難な地位に追ひ込まれるに至つた。

第三章 第六回大會から第七回大會前迄

(一) コミンテルン第六回大會

コミンテルンは尠くとも一年に一回は其の世界大會を開催すべき其の規約（第六回大會の決議で二年に一回と改められた）にも拘らず大正十三年（一九二四年）六月開催の第五回大會後は其の事なく擴大執行委員會總會の開催でお茶を濁して來たが四年を経過した昭和三年（一九二八年）七月十七日から九月一日に亘つて始めて其の第六回大會を莫斯科に於て開催した。

第六回大會に於ては第四回大會以來の懸案たるコミンテルンの綱領を決定した。同綱領は冒頭に「既に資本主義社會の内部に社會主義の物質的前提條件が成熟し、人類社會を包む資本主義的外殻が人類將來の發達にとつて最早耐え難い極點となり、従つて人類の歴史は資本主義の暴壓を革命によつて覆滅せしむべき任務を刻下の問題として吾人に提供してゐる」旨を論斷し、コミンテルンを以て「資本主義體系の墓穴を掘る革命プロレタリアートの國際的機關たる歴史的要望の表現者として、プロレタリアート獨裁並に共產主義の綱領を有し世界プロレタリアート革命の組織者として公然名乗り出る唯一の國際勢力をなす」と宣言し、「コミンテルン綱領はプロレタリアート國際革命運動の凡ゆる史的經驗を批判的に普遍化した最高のものであつて、尙且つ世界プロレタリアート獨裁の爲めの闘争綱領、世界共產主義の爲めの闘争綱領をなすものである」と規定し、「支那階級をして共產主義の前に戦慄せしめよ。プロレタリアートが其の革命に於て失ふべきは自己の鐵鎖のみである。獲得し得べきは全世界である。萬國のプロレタリアート團結せよ。」と結んだ。そして同綱領は資本主義の植民地をも含む世界的規模に於ける擧取組織に應じて有名な三箇の革命形態を區別したのであつた。

本大會はコミンテルン綱領と並んで、コミンテルン規約の改正を行つたがこれは第五回大會決議の「露ボルシェヴィキ化」の内容を加へた外、小部分の改正に過ぎない。

次に本大會は第一次歐洲大戰後の國際情勢を分析して三期となし、第一期は「資本主義制度の最も尖鋭化された時期、プロレタリアートの直接革命的襲撃の時期」であつた。一方では外國干渉及び國內反革命の諸勢力に對するソ聯邦の勝利、プロレタリア獨裁の堅牢化及びコミンテルンの組織、他方では西歐の一聯の痛々しき敗北及びブルジョアジーの共同進撃の開始」があり、やがて大正十二年（一九二三年）の獨逸プロレタリアートの敗北を以て終期とする。此の敗北に續いて開始された第二期は「資本主義制度の逐次築かれた部分的安定、資本主義經濟の復興過程、資本進撃の發達と擴充、及び痛々しき敗北によつて弱められたプロレタリア軍の將來の防禦戰の時期」である。「又他方からは、此の時期はソ聯邦に於ける迅速な復興過程及び社會主義建設事業に於ける最も眞摯な成功並にプロレタリアートの廣汎な大衆に對する共產黨の政治的影響の増大した時期である。第三期に於ては資本主義經濟並にこれと殆ど同時にソ聯邦經濟が戰前の水準を凌駕する。資本主義世界にとつては此の時期は技術の急速な發展、カルテル、トラスト及び國家資本主義への傾向の高められた時期である。夫れと同時に「世界經濟の矛盾の最も激しい發展の時期である。此の生産力の増大と狹隘化された市場間に於ける矛盾が殊に深く尖鋭化された第三期は帝國主義諸國間の帝國主義戰爭、ソ聯邦に對する戰爭、帝國主義と帝國主義者の干渉に反對する民族解放戰、巨大な階級闘争の新段階を不可避的なものたらしめる。一切の國際的矛盾（帝國主義的諸國家とソ聯邦間の矛盾、支那の分割及び帝國主義者間の闘争の端緒としての北方支那の軍事占領）を尖鋭化し、資本主義諸國家に於ける内部的矛盾（勞働階級大衆の左傾化の過程、階級闘争の尖鋭化）を尖鋭化し、植民地運動（支那、印度、埃及、シリア）を擴大しつつある。此の時期は資本安定の矛盾の今後の發達を資本主義の今後の動搖と資本主義の一般危機の尖鋭化へ不可避的に導くものである。」（國際情勢とコミンテルンの諸

任務に就いて）となして、今や世界が戰後の第二期から第三期へ移行したことを規定した。而して將に來るべき戰爭の危機に就て同大會はコミンテルンの戰爭に對する原則的態度を決定し、現時代の戰爭を三形態に分類し、「第一は帝國主義國家相互の戰爭、第二はプロレタリア革命乃至社會主義を建設しつつある國々に反對する帝國主義的反革命戰爭、第三は植民地諸國に對する民族革命戰爭、殊に植民地のそれであつて、此等の戰爭に於て帝國主義國のみが反動的であり、帝國主義に反對する戰爭は何れも正當であると爲じ、今や「市場獲得を目標とする帝國主義列強間の對立は益々尖鋭化しつつある」が、それにも増して「最近の諸事件は全帝國主義列強の政策の主要戰線が益々公然とソ聯邦及び支那革命に反對して向けられてゐることを示してゐる。」（帝國主義戰爭に反對する闘争と共產主義者の諸任務）と説明して「來るべき帝國主義戰爭に反對する闘争の問題、ソ聯邦の擁護、支那に於ける武力干渉と支那の分割に抵抗する闘争、支那革命及び植民地の叛亂の擁護これが刻下の共產主義運動の主要な國際的任務である」として、各國共產黨に課するに、「ソ聯邦を守れ」、「植民地民族及び被壓迫民族の革命的闘争を支持せよ」、「帝國主義戰爭反對」、「帝國主義戰爭の内亂への轉化」、「自國帝國主義の敗北」なるスローガンを以てしたのである。蓋しソ聯邦に對して「帝國主義者が勝利を占めることはソ聯邦のプロレタリアートの敗北となるのみならず、世界のプロレタリアートが皆て蒙つた中で最も痛々しい敗北となるであらう。勞働者運動は幾十年の昔に授けられて仕舞ふてあらう」が故に、「ソ聯邦を擁護する爲めの闘争は必然的に總ての注意の中心點とならなくてはならない」（國際情勢とコミンテルンの諸任務に就て）といふのである。而して又此の國際プロレタリアートのソ聯邦援助の義務は同大會に於て決定されたコミンテルン綱領に掲げられて居る所である。即ち「ソ聯邦の意義と其の國際革命的義務」に於て「ソ聯邦はプロレタリア獨裁社會主義建設國にして、又勞働階級の大勝利を得たる國、勞働者農民同盟の國、マルキシズムの旗幟の下に進む新文明國なるが故に必然的に全被壓迫階級の世界的運動の根據地、世界革命の發源地」であつて「世界プロレタリアートはソ聯邦に於て始めて實

際的祖國を見出し植民地運動に對する大引力の中心を發見する」と述べ、「ソ聯邦に對する國際プロレタリアートの義務」として「ソ聯邦を唯一の祖國とする……國際プロレタリアートはソ聯邦の社會的建設事業の成功に助力し且つ全力を以て資本主義諸國よりの攻撃を防衛すべき義務がある」。「ソ聯邦に對する帝國主義國の侵略及びソ聯邦に對する挑戦の場合國際プロレタリアートは最も大膽にして決定的な大衆進出及び闘争に訴へてプロレタリアート獨裁並にソ聯邦との同盟を標語として帝國主義政府倒壞の闘争を敢行しなければならない」。

「植民地、特にソ聯邦を侵襲する帝國主義隸屬下の植民地に於ては、帝國主義軍備の閑隙に乗じて帝國主義の桎梏を脱し完全な獨立を獲得する爲めの革命的進出の組織及び反帝國主義闘争の進展の爲めに最大限の努力を傾倒しなければならぬ」としてゐる。

茲に我々はコミンテルンが世界革命の參謀本部たる眞面目を喪失して、ソ聯邦擁護の本性を曝露したことを知り得るのである。而して又、此の事實は其の爾後の活動が雄辯に物語る所であるが實は此れはコミンテルンの「指導的支部」たる全聯邦共産黨の方針に基く所なのである。

①一國社會主義

既に前章に於て述べた如く昭和二年（一九二七年）十二月第十五回黨大會に於て反對派を一掃したスターリンは新經濟政策に基く社會主義的建設の第二期たる復興期は大正十五年（昭和二年）（一九二六―二七年）を以て終了して、今や第二期たる社會主義的建設の新時代一國民經濟の技術的基礎の改革、改造時代に入つたと爲して、昭和三年（一九二八年）十月から一國社會主義に基く五箇年計畫を實施するに至つた。五箇年計畫の目標はソ聯邦國民經濟全般の工業化就中重工業の確立と全國民經濟に於ける社會主義的比重の増加とに在る。即ち全産業の根幹たる重工業、機械工業、電気事業等の發展―此れは國防力の充實に他ならない―を根本として農業の所謂社會主義化―機械化へと向つた。農業の機

械化は其の共同經營的方法によつて其の生産力の増大を企圖すると共に農産物の政府重荷を容易ならしめ、資本主義分子發生の巢窟であつた従来の個人農法を絶滅し、併せて工業化の需要する莫大な勞働力を生み出すに在つた。而して此の工業化政策とこれに關聯する農民政策は當時のブラウツ紙（昭和三年十一月二十五日社説）の所謂「ソウェイト國家の運命を決する」大問題となつた。蓋し其の工主農從政策は國內物資の極度の缺乏状態を招來し、延いて此の政策に對する反對分子を激増せしめたのみならず、極端な恐怖手段による政策の強行は反政府熱の深刻化を齎したからである。然しながらスターリンは反對派を次々と葬つて自己の陣營を強化し、以て五箇年計畫遂行に邁進したのである。即ち當時富農の勢力が増大して政府の穀物買上が農民の反抗に逢ふや、スターリンはトロツキー派の政策を奪つて昭和四年（一九二九年）六月富農征伐の方針を決定し所謂左偏政策を採つたのに對し、嘗てはコミンテルン陣營内の理論的指導者として活躍し、スターリンの政策に對して常に其の理論的根柢を與へたと評されたブハーリンは富農の存在を否定し農業に於ける蓄積増大の爲めなほ暫く従来の方針に依るべき事を説いてこれに反對したのであるが、彼はコミンテルン第六回大會の決議に反對して資本主義動搖の激化の事實に對し日和見主義の否定を與へた事等と併せて昭和四年（一九二九年）七月開催のコミンテルン第十回執行委員會總會の決議により其の幹部會から罷免され、同年十一月黨中央委員會總會の決議によつて政治事務局から放逐された。又、ソ聯邦人民委員會議長レイコフは昭和五年（一九三〇年）十二月其の地位を逐はれ、黨政治部員の職をも罷免された。其の他トムスキイの敗退（昭和四年―一九二九年）スイルツォフ、ロミナーゼ、リムンチンの放逐（昭和五年―一九三〇年）等スターリンは左右傾向の異端者を悉く彈壓して、全聯邦共産黨のみならず政府最高中央機關をも其の掌中に收めて其の獨裁の權力を固め、其の政策強行による犠牲者の反抗に對して假借なく彈壓を加へて國內の異論を封じたのである。

而して又他方、政府は列強の對ソ干渉の危険を絶叫して五箇年計畫遂行に國民を驅り立てたのである。此れは昭和三

年（一九二八年）三月のドンバス炭坑陰謀事件の發表に見られる通り既に第一次五箇年計畫着手前からの事であつて、爾來昭和五年（一九三〇年）の産業黨事件、昭和六年（一九三一年）のメンシエヴィキ聯盟局事件等で佛蘭西軍部を中心とする西方からの干渉戦争の幻影、歐米各國のソ聯邦に於ける宗教壓迫、ダンピング及び強制労働に對する反對運動等それは漸次國際情勢の變轉と共に眞剣となり、殊に昭和六年（一九三一年）秋以來の我國の北滿進出後を殊に然りとす。此の如くにして強行された第二次五箇年計畫は昭和七年（一九三二年）十二月を以て四年目で打切られたのであるが、續いて其の翌年一月一日から開始された第三次五箇年計畫（昭和九年—一九三四年一月—二月開催の全聯邦共産黨第十七回大會に於て決定）に於ては、既に昭和七年（一九三二年）五月に採用された所謂スターリン・ネツプ（ホルホズ商業の採用）等と共に國民の日常生活の不安定並に其れに基く國民大衆の深刻な不満を緩和する爲めに、産業の質的改造、生活水準の向上等國民の日常生活の安定を目的としたのである。

然しながら第一次五箇年計畫の強行によつて民心に植付けられ、然も彈壓下に鬱積した深刻な不満は容易に拭ふべくもない。殊に昭和八年（一九三三年）には獨逸に於ては反共政策を眞向に振り翳したヒトラー内閣が成立して、爾來獨逸の復興目覚しく且ククライナ其の他東方進出を目指してあると言はれ、其の翌年五月には波蘭をして反ソ態度を採らしむるに至つた。かくて極東（日本）及び西歐（獨逸）の戦争の危機に對しては現に昭和九年（一九三四年）十二月一日黨の中堅分子に依るキローフ暗殺事件に爆發した如き相當深刻な國民の反ソウェード感情を以てしては此れに對處し得ない事は明白である。かくして政府は軍備の充實は言ふ迄もないことであるが、對外的には平和政策を極力推進して、對日、對獨逸を策すると共に、國民の不平不満を緩和して現ソウェード政権に信頼を寄せしめ對外危機に際しての内部的動搖を防止するのみならず進んでソ聯政権に忠誠を致さしめんとする政策、而して又之を經濟方面から觀察すれば全國民經濟部門に於ける從來の低位な生産性を打破して生産能率の増進を圖り以て新しい國際情勢に對處せんとす

る政策を採つたのである。而して其の一聯の諸方策の中で我々の看過し得ないことは昭和十年（一九三五年）二月一日全聯邦共産黨中央委員會總會に於て突如としてスターリンが提案した選舉制度改正を中心とする憲法民主化問題を始め、同年二月の農民に對する私經濟の許容（農業アルテリ模範定款の改正）等の如き自由主義的諸方策と共に日々新聞紙上に於ける内亂戦の際の赤軍の功績賞揚等國防觀念、祖國擁護觀念の涵養注入を目的とする諸方策である。

ソ聯邦人民委員會議長モロトフは昭和十年（一九三五年）二月六日第七回全聯邦ソウェード大會に於て、同月一日の黨中央委員會總會の決議に基いて黨中央委員會代表の資格に於いて憲法改正に關する報告演説を行つた際に「ソ聯邦國民の廣汎な大衆間に自己の國家、自己の祖國に對する誇が増大せることは明かであらう。我々は此の感情即ち小ブルジョアの的な凡ゆる殘滓の清算に必要な社會的財産權に對する意識的態度の増大と不可分に結合した祖國に對する責任の感情を涵養しなければならぬ。ソウェード愛國主義は決して國民的偏狹の徴候ではない。現在、ソウェード愛國主義はソ聯邦の全民族の勞働者農民の偉大な革命的勢力の自覺として、社會主義建設の成功が萬國の勤勞者に對して有する偉大な意義の自覺として大衆間に成長しつつある」と語つてゐる。茲に我々はソ聯邦が社會主義の假面を覆つた國家資本主義の國家に他ならない實相を露呈して行く姿を看取せざるを得ないのである。

② 「ソ聯邦を守れ」

コミンテルン第六回大會は世界が所謂戦後の第三期に入つた事を決議した。然し當時は未だブハーリンが主張した如く資本主義諸國の好景氣時代であつたのであるが、其の後一年にして世界は漸く不況時代に入つて、第六回大會の見透の誤たなかつたことを示したのである。殊に繁榮を誇つた米國の經濟恐慌は一層これに拍車を加へ、全世界が深刻な不安動搖の渦中に捲き込まれたのみならず、諸國間の對立は益々尖鋭化したのである。即ちコミンテルンにとつては其の第三回大會以來の防禦政策から反轉して攻勢に出て、積極的に世界革命に乗り出すべき待望の好機が到來したわけであ

る。現に昭和四年(一九二九年)柏林の赤色メーデーを始めとして世界各地に於て罷業の勃發、労働者の工場占領、昭和六年(一九三一年)四月の西班牙に於ける王政顛覆等労働階級の反抗闘争が熾烈化して來たのであつた。然るにコミンテルンは此の好機に恵まれながらも、前述の如く昭和四年(一九二九年)七月のコミンテルン第十回執行委員會議に於てブハーリンの放逐と關聯してコミンテルン内部の陣容の整備を絶叫し、獨逸、米國、チエツコスロバキヤの右傾派幹部を除名したり、或は決議や演説等に於て常に革命的危機の切迫(例へば獨逸、波蘭、西班牙、支那等を以て革命的危機の成熟した國として擧げて居る)を宣傳、煽動して各國共產黨に権力奪取闘争に對する準備を命ずる等表面的には世界革命に忠實なるが如き態度を示して居るが、其の實見るべき革命的實踐を見せてゐない。加之我々は其の激越な世界革命強調の言葉を弄しつゝ、「帝國主義戦争と戦へ」、「ソ聯邦を守れ」のスローガンに端的に表明されてゐる通り常に巧に各國共產黨をソ聯邦擁護の機關たらしめてゐるのを見るのである。例へばコミンテルン第六回大會の決議に基いて昭和四年(一九二九年)三月柏林に開催した十四箇國共產黨代表者會議の決議(此れは同年七月のコミンテルン第十回執行委員會議で承認された)に依る同年八月一日の反戦デーの主目標は「世界のブルジョアジが莫斯科に對する闘争を激化せしめ、又獨逸が社會民主主義の觀念的組織的指導の下に反ソウエト戦線に向つて進出した等、最近の事實に依つて、ソ聯邦に對する帝國主義戦争の企劃が焦眉の急に迫つた事が明白となつた事情に鑑み」て「ソ聯邦防衛の爲め労働者大衆を最も廣く動員すること」と「此れに關聯して大衆を動員して社會フアハシズムに對抗して共產主義に向はしめる」(同年五月十六日コミンテルン西歐局の宣言)ことに在つたのである。

而して此の間の消息は昭和五年(一九三〇年)六月二十七日第十六回大會に於けるスターリンの黨中央委員會議政治報告演説が雄辯に物語る所である。即ち彼は一方では或は資本主義の危機を唱へ「この不景氣時代こそ共產黨を大衆の黨とし、コミンテルンの勢力を擴張させる好機である」と爲しつゝ、或は經濟危機の増大につれて世界軍國主義諸國の

ソ聯邦に對する冒險的挑戰と干渉出兵の傾向が濃化するが然も彼等はソ聯邦の國力の充實を知ると共に其の背後にはソ聯邦に對する出兵を拒み斯る場合に資本主義の背後を衝く労働者があると指摘し、或は資本主義諸國がソウエト國體を好まないと同様に我々も資本主義國體が氣に入らないと稱しながら、他方に於て我々に借款を許すならば帝政露西亞の國債の一小部分を利子を附して任拂ふとか、内政干渉はしないと唱へて、更に「我が政策は和平政策であつて、他の諸國と通商關係を深めるにある。」此の政策は今後も全力を傾注して實行するもので、我々は他國の一握の土地を欲せず、而して我々の一握の土地をも他に與へんとするものではない。」と述べてゐる。

思ふにソ聯邦は既に述べた通り期待した西歐革命の援助の望が絶えたから國內の異論を押し切つて一國社會主義の實施に邁進したのである。されば一國社會主義建設に乘出したソ聯邦にとつては今直ちに世界革命の實行に乗り出す必要がなくなつたのである。加之ソ聯邦が「資本主義制度復活に對する完全な保障」を得る爲めに、殆ど望のない世界革命運動に狂奔するときは、必然的にさもなくとも思はしくない國際關係を惡化せしめて、外國からの資本、技術の輸入の途を絶たれ、折角着手した世界革命の基地強化たる五箇年計畫遂行に一大障害を齎すのみならず、延いては戦争の危険をすら負擔しなければならぬ。然るときは五箇年計畫の實施の如きは思ひもよらず、更に國內民心の動向が定まらない現狀では十月革命の成果を一舉に葬る破目に陥らないとも限らない。従つて世界革命の矛は應收めて其の對外政策の基調を平和政策に置かなければならぬ事は事理の當然である。

「ソウエト外交の最大の使命は社會主義建設のため平和を維持し、外國との紛争から自由の立場を確保するに在る。ソ聯邦は其の建設計畫の規模大にして且つ、其の速度の急を加ふるに従つて、益々平和の確保を急務とする。我々は現在資本主義諸國圍繞の下に社會主義の建設を爲すべく餘儀なくされてゐる。資本主義國家と社會主義國家、此の二つの異つた社會組織の平和的共存の方法を發見する爲めに我々は最大の努力を盡すだらう。」とは昭和五年(一九三〇年)七

月リドヴィノフが外務人民委員就任に際し各國記者との會見で聲明した言葉である。

三四

かくてスターリンの演説に於て我々の知ることは表面に於てはコミンテルン第六回大會の決議に従つて體裁を繕ふ爲めに二應は世界革命の空宣傳をしながらも、其の實裏面に於てはコミンテルンの「指導的支部」たる全聯邦共產黨即ちソ聯邦の平和政策と相容れないコミンテルンの世界革命政策を拋棄して其の活動を「ソ聯邦擁護」に撥替へたことを表明するものに他ならないといふ事である。否、コミンテルン第六回大會の決議そのものが既にスターリンの此の意圖を藏してゐたと考へられるのである。されば昭和六年（一九三一年）四月のコミンテルン第十一回執行委員會議は佛國を中心とする西部隣接諸國の對ソ戰爭準備に對する防衛の爲め露骨にも「反ソ聯邦武力干渉の脅威増加と共產黨員の任務」なる決議を行つて軍隊内部に對する非合法活動すら強調してゐる。加之、其の「ソ聯邦擁護」は列強の對ソ干渉を妨害する爲めの共產主義運動による國內擾亂の外に、茲には詳述を省くが、「ソ聯邦擁護」の思想を注入された各國共產主義者をソ聯邦の行ふ謀報略略活動に利用することに役立つて居ることは注目すべきことである。

又、昭和六年（一九三一年）滿洲事變が勃發し、此れに伴つて極東の情勢が緊迫を告げるや、コミンテルンは之を以て世界恐慌の血路を見出さんとする帝國主義者による支那の新たな分割を意味するものと斷じ、國際革命運動に關聯を有する重大事件と見ながらも抄々しい實踐的革命的活動を行つてゐない。却つて、昭和八年（一九三三年）一月の黨中央委員會及中央統制委員會合同總會の席上スターリンが隣接諸國中不戰條約の締結を肯じなかつた國があつたことと極東の情勢が險惡化した爲め國防強化上急遽多數の工場を軍需品製造に向けた爲め第一次五箇年計畫の工業生産は九三パーセントしか遂行出来なかつたと告白した通り日ソ開戦を豫想したソ聯邦の政策に従つて、コミンテルンは事變を目して對ソ武力干渉準備の具體的一步を踏み出した事を意味するものと爲して「ソ聯邦擁護」、「反帝國主義戰爭」のスローガンを強調したのである。此の事實は往年の露支紛争（昭和四年—一九二九年）の際自國權益擁護の名の下に行はれた

ソ聯邦の支那出兵の場合のコミンテルンの態度と思ひ併せると第六回大會決議の戰爭形態の分類が如何にソ聯邦本位のものであるかが判然とするのである。而して昭和七年（一九三二年）皇軍の北滿進出、上海事件勃發以後は殊に此の運動は熾烈化して來たのであつて、同年九月のコミンテルン第十二回執行委員會議の決議（「極東の戰爭と帝國主義戰爭並に對ソ軍事干渉反對闘争に於ける共產主義者の任務に就て」）は日本共產黨に對し滿洲駐在の日本陸海軍の共產化をすら命じてゐる。

昭和八年（一九三三年）獨逸に於けるナチスの政權獲得、獨逸共產黨の壊滅に對しては、コミンテルンは獨逸ファシズムを世界的反動と見做して其の攻撃を始めたが、これも畢竟ソ聯邦の脅威となつた新興獨逸に對する其の擁護策に他ならぬ。

他方ソ聯邦の平和政策は昭和八年（一九三三年）メトロポリタン・ウィッスカーズ會社技師逮捕事件に端を發した英國との紛争も大した事態を醸すことなく、列強間の利害の對立激化の間に乘じて、獨逸のナチス政權獲得に狼狽した佛蘭西を始め伊太利其の他隣接諸國との不可侵條約の締結、英、米、支等との國交恢復、對日滿紛争回避策としての北滿鐵道の賣却提議（昭和十年—一九三五年三月二十三日讓渡の正式調印成る）等を行ひ、昭和九年（一九三四年）九月には佛蘭西の斡旋に依つて遂に、コミンテルンが其の「社會主義的假面を剥ぎ取つて其の非を擧げ」（コミンテルン綱領）せよと命じ又常に帝國主義的平和主義の重要な機關、國際罪惡の根源として凡ゆる惡罵嘲笑を浴せて來た國際聯盟に「平和維持の爲め列國を支持する爲めに」（九月二十日付イズヴェスチヤ）加入して聯盟理事會の椅子を占めるに至つた。かくてソ聯邦は嘗て東西から脅威を感じつつも國際的に孤立の地位に在つた時代に比して、對外的に大いに其の立場を改善したものと云はなければならぬ。

要之、ソ聯邦は其の世界革命の企圖—夫れは赤色帝國主義に他ならない—實現の爲めの一國社會主義—此れは國家資

本主義に他ならない建設に必要な「一時的休息」を、一方に於てはソヴェト政府の名に於て行ふ平和協調政策により、他方に於てはコミンテルンの名に於て行ふ資本主義諸國の對ソ干渉を阻止せんとする凡ゆる活動によつて確保せんとしたのである。従つて此の事はコミンテルンをして其の世界革命の企圖を抛棄せしめることとなり、その代り其の創立當初からの全聯邦共産黨即ちソ聯邦の忠實な手足たる本質を強く前面に押し出ししめることになつたのである。かくてコミンテルンの政策は「ソ聯邦擁護」の一語に盡きると言へる。「帝國主義戦争反對」のスローガンは其れが對ソ干渉戦争に轉化する危険あるものとして主張するものであり、植民地の革命運動は、帝國主義諸國の經濟市場を奪つて其の背面を脅し以てソ聯邦擁護に資せしめんとするに過ぎないのである。従つてコミンテルンの世界革命抛棄が必然的に各國共産黨の衰退を齎すことも當然と言はなければならない。次に一、二の例を示さう。

④ 各國共産黨の衰退

獨逸共産黨はコミンテルンから最重要視されてゐる支部である。大正七年（一九一八年）成立後國內の不況動搖時代に乘じて急進的活動を續けたが何れも失敗に終り、大正十三年（一九二四年）頃以降は獨逸國內の安定と黨内の對立等によつて其の勢力を失つた。然し其の後經濟的不況の深刻化に伴ふ勞働階級の不滿の増大につれて漸次其の勢力を加へて來た。選挙闘争に於て之を觀るに大正十三年（一九二四年）十二月の總選挙に於て二百七十萬の得票と四十五の議席を獲得したのに對し、昭和三年（一九二八年）五月の總選挙には三百二十六萬の得票と五十四の議席を、昭和五年（一九三〇年）九月の總選挙には四百五十九萬の得票と七十七の議席を、昭和七年（一九三二年）七月の總選挙には五百二十七萬の得票と八十九の議席を獲得して選挙毎に相當な進展を見せ、同年十一月の總選挙では五百九十七萬票の得票と百の議席を獲得して議會に於て國民社會黨（議席一九五）社會民主黨（議席二二一）と共に勢力を三分するに至つた。まことに人をして其の將來の發展を豫想せしむるに十分なものがあつた。然し事情は一變した。昭和八年（一九三三年）

一月シユライヘル内閣瓦解の後を受けてヒトラー内閣が成立した。ヒトラーは國會解散斷行の二月一日夜ラジオを通じて全國民に對し新内閣の施政方針を演説したが其の中に「十四年間のマルキンズムは獨逸を破壊した。一年間のボルシエヴィズムは獨逸を滅亡せしめ終るだらう」と反共主義の趣旨を極めて露骨に闡明した。ヒトラー内閣は共産黨取締を嚴重にし二月二十七日夜の國會放火事件を機會として全國に亘つて其の一斉檢査を行ひ、テールマン以下主な幹部を殆ど全部逮捕した。かくてソ聯邦の黨に次いでコミンテルンの最大最強の勢力を有する黨と誤はれた獨逸共産黨は抵抗らしい抵抗も見せず破壊された。而して此の間コミンテルンは獨逸共産黨に對して何等力ある支援を與へなかつた。加之四月一日の其の執行委員會幹部會に於ては「ヒトラー・クーデターの以前並びに當時に於て同志テールマン指導の下に獨逸共産黨が遂行した政治方針及び組織政策を完全に正當」なものと認め、プロレタリア階級分裂の責を社會民主黨に負はせた後、「フアンズムの勝利の後の現在の鎮靜期は一時的なものである。獨逸に於ける革命の大波はフアンズムのテロにも拘はらず不可避的に増大するであらう。フアンズムに對する大衆の反抗は必然的に増大せざるを得ない」が故に今度こそ「社會民主黨及び共産黨の勞働者の統一戦線を組織し」以て「武装暴動によつて資本主義及びフアンズト獨裁を顛覆する爲め決定的な革命的闘争に對し大衆を準備することが必要である」と決議してゐる。之を例へば獨逸を以て革命的危機の成熟した國として勞農共和國のスローガンを獨逸共産黨に命じた前年の昭和七年（一九三二年）九月のコミンテルン第十二回執行委員會總會の決議（「國際情勢とコミンテルン各支部の任務に就て」）と比較すると思ひ半に過ぎるものがある。獨逸共産黨の惨敗は如何にコミンテルンが自己辯護しようとも、コミンテルンの革命的實踐の缺如を暴露したものであり、又既に述べた所によつて當然の歸結たることを知るのである。

然しながら、唯、支那の革命運動のみは進展を續けつつあつた。前に述べた昭和二年（一九二七年）十二月の廣東暴動失敗後、支那の共産主義運動は國民政府の彈壓下に沈滞期が續いた。其の間、漸次紅軍とソヴェト區域の擴大に力

め昭和五年（一九三〇年）七月には長沙占領事件を惹起した。コミンテルンは支那の革命に多大の關心を寄せ其の發展を待望しつつも、數次の指令によつて李立三路線の錯誤を指摘した外には積極的な援助を示してゐない。

然るに昭和六年（一九三一年）九月の滿洲事變勃發、次いで翌年一月の上海事變の發生は沈滞を續けた中國共產黨の活動に有利な條件を與へ、民衆の反日反帝國主義的風潮と國民政府の消極的態度に對する不満とは其の活動の急速な發展を齎した。昭和六年（一九三一年）十一月には江西省瑞金に「中華蘇維埃共和國臨時政府」が樹立され、「一省又は數省に於ける首先的勝利」を目標に其のソウエト區域を支那中南部に擴大して行つた。コミンテルンは此の情勢に應じ、殊に皇軍の哈爾濱入城と時を同じくした上海事件勃發するや全世界的に活動を開始した。然しそれは「支那ソウエト擁護」「日本帝國主義打倒」等のスローガンが掲げられてゐてもソ聯防衛の線に沿つてゐる。蓋しコミンテルンが全支に興起した支那民衆の反日反帝國主義的氣運を煽動することは此れによつて國民政府の無力を曝露して支那赤化運動に資し、反帝國主義運動の擴大は恐惶下にある帝國主義諸國に對して支那市場を失はしめることとなり、此れは帝國主義諸國に對する打撃たるのみならず延いて其の對ソ武力戦争を避けしむるに役立つといふことに他ならないのである。況や反日運動を契機として日支間に戦争勃發することあらんか、一は支那革命の促進に資し一はソ聯の極東に於ける安全感を確保する所以に他ならない。要之、コミンテルンはソ聯の意圖する平和政策の裏面道を進んで此れに奉仕したものである。此の事はソ聯が危惧しつつあつた皇軍の北滿進出と時を同じうした上海事件勃發を期としてコミンテルンの活動が積極化した事實と符合するものである。然らば支那ソウエト運動發展の事實は之を如何に見るか。これは他でもない、共產主義の看板の下に現はれた自然發生的な土匪の運動であつて、コミンテルンが其の情勢に便乗しつつあるに過ぎない。此の事はコミンテルンが凡ゆる機會に支那革命の性質を「ブルジョア民主主義革命」であると規定しつつソウエト政權の直接樹立を認むる態度に現はれてゐるのである。されば上海事件解決後國民政府が徹底的「圍剿」

を開始するや、既往數年間江西省瑞金を中心として勢威を逞うした中央ソ區紅軍が其の根據地を放棄して、昭和九年（一九三四年）十月二十日から西遷移動を開始した事實も故なき事ではない、況や中國革命を重要視した日頃の其の言葉通りにコミンテルンが其の發展に實踐的援助を與へたとするならば、豫て此の動向に對し注意を怠らない列國との間に紛争を惹起すべく特に東洋赤化防止の爲めに日本が立ち上ることはソ聯外交機關の別働隊たるコミンテルン自身の最も恐れてゐることであるに於てをやである。

ソ聯の平和政策は昭和九年（一九三四年）の國際聯盟加入を以て一段落を告げるに至つた。此の聯盟加入は日本及び獨逸に對して備へたものである。然しながらそれと同時にソ聯の平和政策によつて抑制されたコミンテルンの活動は其の消極性に加ふるに世界各國に於ける國家主義運動の擡頭に壓倒せられて一路衰退し、嘗ては其の最有力支部と言はれ三十萬の黨員を擁すと言はれた獨逸共產黨は一敗地に塗れ、次いで支那紅軍の西遷を見るに至り、コミンテルンはソ聯共產黨を除いては殆ど有力な支部を有せざるに至つた。昭和九年（一九三四年）一月開催の黨第十七回大會に於てスターリンがソ聯の平和政策を強調したのに對し、コミンテルン派遣代表團の活動報告に於てマヨイルスキーが「我々は現在の世界的危機を利用することを忘れたるかの如きコミンテルンの無能と多くの弱點と誤謬とを指摘せざるを得ない。」「世界經濟危機の數年はコミンテルン創立以來十五年間未だ曾て經驗しない苦惱の數年であつた。」と嘆ぜしめたのは皮肉とも言ふべく、又當然の歸結と言はねばならない。

第四章 第七回大會から獨り不可侵條約締結前迄

(一) コミンテルン第七回大會

昭和六年（一九三一年）の滿洲事變の勃發、昭和八年（一九三三年）のナチスの制覇以來、日、獨、伊、波等各國の

國家主義勢力は益々進展して行つた。これは其の對蹠的思想體系に立つソ聯邦の大きな悩みである。ソ聯邦は既に述べた通り内に於ては國內應勢を整備し、外に於ては平和政策を堅持すると共に、其の別働隊たるコミンテルンをして刻々と押し寄せて来る所謂ファツシヨの脅威に對處する爲め其の第七回大會に於て反ファツシヨ人民戦線戦術を採用せしめたのである。

コミンテルン第七回大會は昭和十年(一九三五年)七月二十五日に開會され八月二十日に閉會した。コミンテルンの規約に依れば少くとも二年に一回は其の大會を開催すべきに拘らず、昭和三年(一九二八年)七月即ちソ聯邦が第一次五ヶ年計畫に着手する直前に第六回大會が開催されたから以後、創立十五周年に當る昭和九年(一九三四年)上半期に各國共產黨の熱心な要望もあつて開催の豫定が再三延期されて第七回大會開催迄七年間を経過してゐる。此の七年の間は最もコミンテルンの活潑な活動を要求し其の世界的戦術を決定すべき大會の開催を必要とした國際情勢であつたのである。然るにも拘らずコミンテルンは何故長期間大會を開催しなかつたのか。それは他でもない、ソ聯邦一國の便宜から出たことなのである。

即ち、先づ第一に其の對外的原因を擧げることが出来る。既に述べた通りコミンテルンの世界革命の目的は一應拋棄されて、今やソ聯邦にとつては利用價値のあるのは其の「ソ聯邦擁護」の役割のみである。然し此れとて慎重に利用しなければならぬ。各國共產黨の熱心な要望もあるが、殊に其の大會の開催は必然的に、平和政策によつて締結された各國との條約中の内政不干渉の條項違反として各國との有害無益な摩擦を招來することとなり、國力充實の爲めにソ聯邦が採りつつある平和政策に障害を與へるものである。即ち昭和九年(一九三四年)下半期に開催豫定の大會在ソ聯邦の國際聯盟加入の爲めに延期されたと言はれる所以である。

第二には其の對内的原因としてコミンテルンの指導體たる全聯邦共產黨及びコミンテルン内部に於ける反對派の存在

を擧げることが出来る。既に述べた通り黨の中堅分子に依るキローフ暗殺事件は前者のその現はれてゐる。又後者の例としては昭和十年(一九三五年)六月七日黨中央委員會總會の決議に依つて黨から除名されたエヌキーゼが該當するものの如くである。其の除名理由については詳細な公表がないので判明しないが、ソ聯邦の平和政策によるコミンテルン活動の極度の抑制、國際聯盟加入後はソ聯邦の新聞からコミンテルンの記事が消えて仕舞つたに對してソ聯邦内外の純理派が不満を抱くのは當然と言はねばならない。殊に從來惡罵の限を盡した國際聯盟にソ聯邦が加入したことが此の勢を煽つたことは想像出来る。純理派のエヌキーゼは發表によると國外の露西亞人を含む共產黨系反スターリン派と連絡してゐたことであるからして、かゝるソ聯邦内外の分子がスターリンに對する個人的感情も手傳つて相互に連絡するに至つたことは確實である。此の事はエヌキーゼ事件に關聯して黨内のコミンテルン關係者に對し大彈壓のあつたことで裏書きされる。

さればソ聯邦内に於ける經濟建設の進捗と國內反對分子の大規模な清掃の斷行に依る清黨の見透がつき、其の平和政策が國際聯盟加入を以て一段落を告げるに至るや、共產黨の陣營が各國に澎湃として興つた國家主義の風潮の前に脅かされ、至る所て全面的に敗北を喫したのみならず、對ソ武力干渉の脅威の迫つた國際情勢に對して、所謂ファシズムの攻勢に對する闘争戦術を確立してコミンテルンの旗の下に集ふ各國共產黨の要望にも應へ、以てソ聯邦防衛に資する目的でコミンテルン第七回大會が開催せられるに至つたのである。

此の大會は此の如く重大な任務を持つて居た。然るに、本大會が其の重要性にも拘らず、盲目的なスターリンに對する頌徳とファシズム罵倒とソ聯邦謳歌とに終始して往年の覇氣も現はれず、唯國家主義思潮の滔々たる時流の裡に世人から忘れられかけんとした其の存在を一應明かにしたに過ぎないかの如き印象を與へたのは、スターリンによつて去勢されたコミンテルンの現状からは當然の事であらう。

本大會は世界情勢を分析して、一方に於てはソ聯邦の社會主義的決定的勝利があり、他方に於ては資本主義史上最大の經濟恐慌があつてブルジョアジエは其の救済をマアシズムに求めて、勤勞者に對する極端な掠奪的方策の實現、強盜的帝國主義戰爭の準備、ソ聯邦に對する攻撃、支那の奴隸化と分割を目標としてゐるが、此の間世界的規模に於て革命勢力が漸次成長しつつありと觀察し、佛蘭西に於ける社會黨と共產黨との統一戦線の經驗を攝取して反ファシズム統一戦線戦術を決定した。其の要旨は次の如くである。

四二

即ち「ファシズムの絶大な脅威に當面して労働階級統一戦線戦術の達成が現在の史的段階に於て國際労働運動の主要任務」なるが故に、共產主義者は労働階級の經濟上及び政治上の直接利益の擁護から始めて、第二インターナショナル系各團體とも妥協して凡ゆる手段に依り産業的規模並に全國的規模に於ける労働組合の統一實現を期し、更にプロレタリアート指導の下に勤勞農民、都市小ブルジョアジエ及び被壓迫民族勤勞大衆の統一に努力してファシズム陣營に走る虞のある各層をも誘引し、以て、プロレタリア統一戦線の基礎の上に廣汎な反ファシスト人民戦線の樹立を達成しなければならぬ。又、植民地及び半植民地諸國に於てはブルジョア民主主義陣營と妥協して、反帝國主義國民戦線の樹立(例へば支那に於ける抗日人民戦線)に努力しなければならぬ。勿論、此の過程に於て、プロレタリア統一戦線は労働者組織の實力と性質及び具體的情勢の如何に依つて多様な形態を探らなければならないし、又、統一戦線は改良主義、社會民主主義に對する根本的批判及び社會民主主義労働者に對する共產主義の説明を妨げないのみならず一層必要なものたらしめる。更に反ファシスト人民戦線の樹立に當つては一切の大衆的ファシスト組織に加入し、其の組織内に於ける合法的活動をも極力利用してファシスト組織の大衆的地盤を崩壊せしめなければならない。而して此の反ファシズム人民戦線の成功如何は共產黨自體の強化、其の指導性の確保及び其の具體的情勢に則して正しい屈伸性のある戦術に俟たなければならないと言ふのである(「ファシズムの攻撃並に労働階級の反ファシズム統一の爲めの闘争に於けるコミンテルンの諸任務」)。

けるコミンテルンの諸任務」。

更に我々の見落してならないことは、反ファシズム人民戦線戦術に於て「コミンテルン執行委員會の活動に關する決議」の中に「僅かに餘命を盡いでゐるブルジョア民主主義擁護の必要」の一句のあることであつて、獨逸共產黨代表ビツクは本大會の「コミンテルン執行委員會の活動に關する報告」演説に於て「我々がブルジョア民主主義をプロレタリア民主主義プロレタリア獨裁に變じ得る迄はプロレタリアートは一片のブルジョア民主主義にも關心を有し、之を利用して大衆をして資本主義政權顛覆、プロレタリア民主主義獲得の準備をなさしめるのである」と述べ又コミンテルン執行委員會書記長チミトロフは本大會の「労働階級の反ファシズム統一を目指して」なる結語演説に於て「現在ファシスト反革命は勤勞者に對し極めて野蠻な擄取と壓迫との體制を打倒せんと努力しながら、ブルジョア民主主義に攻撃を加へてゐる。現在一聯の資本主義諸國に於ける勤勞大衆はプロレタリア民主主義とブルジョア民主主義との間に於てはなく、ブルジョア民主主義とファシズムとの間に於ける今日を具體的に選擇するの要に迫られてゐる」と述べてゐるのである。要之コミンテルンの新戦術は同年七月二十五日付ブラウダ紙が「コミンテルンの旗の下に」なる題下に「現在の國際労働運動の重要な根本的使命は労働階級の闘争の統一戦線の實現である」。「共產主義者はプロレタリアートの大多數がコミンテルンの綱領に共鳴する迄待ち得るであらうか。否、待ち得ない。即時に、最悪の敵ファシズムの攻撃に對する闘争を一國的及び國際的に組織することが必要である」。「全世界共產主義者の主要なスローガンは過去現在を通じて、ソウエト政權獲得闘争なるスローガンである。然し共產主義者はブルジョアジエの支配形態に無關心たるべきではない。共產主義者が常に最も重要視すべきは勤勞大衆の利益である。従つて彼等は無條件でファシストの進撃に反對し僅かに残つたブルジョア民主主義救済の爲めに闘争するものである」と述べてゐる通り、世界革命よりも先づ急迫したファシズムの急襲を阻止することを急務となして、従來革命の敵として極力排撃して來た社會民主主義のみならず自由主

四三

義とも提携してファシズムと闘争しようと言ふのである。換言すれば此の新戦術はコミンテルンの「指導的支部」たる全聯邦共産黨の指導者スターリンが既に世界革命の意圖を事實上拋棄して自殺を遂げてゐるコミンテルンの殘骸を利用して「獨逸ファシスト及び日本帝國主義者の戦争煽動、資本主義諸國の軍閥の強行した反ソ革命戦争勃發の直接的危險に當面した共産黨の中心スローガンは平和の爲めの闘争である」(帝國主義者の新世界戦争準備に關聯するコミンテルンの諸任務)となして「一應巧妙に編み出した革命的言辭によつて世界革命の本來の使命に忠實なことを表明しつゝコミンテルンの旗の下に集つてゐる各國共産主義者を鼓舞し、其の實日本及び獨逸からの脅威に怯えてゐるソ聯邦防衛(大會の各決議は何れもソ聯邦擁護闘争の展開を命じてゐる)の役割を果さしめんとしたものに他ならない。

尙、大會が「コミンテルン執行委員會の活動に就いて」の決議に於て、其の「執行委員會の活動の重點を世界労働運動の基本的な政治的及び戰術的目標の達成に移すと共に、凡ゆる問題の決定に際しては各國の具體的情勢及び特殊性から出發し、原則として各國共産黨内部の組織事業の問題には直接の干渉を避けること」を決議して、各國共産黨の創意と自主性との發揮によつて各國の實情に即した活動の展開を企圖したことは、自己の世界革命指導の熱意喪失を糊塗するに其の劃一的な國際的な指導性の放棄を以てして、實はコミンテルンの誇る鐵の規律たる中央集權制に自ら亀裂を生ぜしめたことを物語るものであつて、此れは昭和十五年(一九四〇年)十一月の米國共産黨のコミンテルン脱退の容認に表明されたのである。

⑤ 反ファシズム人民戦線

反ファシズム人民戦線戦術は以上の如き内容を有したものであつた。されば此の新戦術は一應はソ聯邦擁護の役割を果し得るとするも、纏てコミンテルンそのものが愈々敗亡の姿を濃化するに至つたのは當然の事である。

コミンテルン第七回大會は新戦術に基き其の決議(「コミンテルン執行委員會の活動に就いて」)に於て「ファシズム、資本の攻勢並に戦争に反對する闘争活動の統一の提言を含む、第二インターナショナル各國支部及指導部宛の一九三三年三月付、一九三四年十月付、並に一九三五年四月付のコミンテルン執行委員會の檄を承認」し、總て此等の提議が第二インターナショナル執行委員會及び其の支部の多數に依つて拒否されたことを遺憾としつつ、尙執拗にも宿敵第二インターナショナルとの提携に邁進することに決定した。而してコミンテルンは大會後その決議に基いて第二インターナショナルに對し執拗に提携交渉を行つたが遂に一致點には到達するに至らずして、コミンテルンの企圖する反ファシズム戦線統一工作は一大頓挫を來した。然しながら客觀情勢の壓迫は兩者の歴史的對立關係を緩和したのみならず、反ファシズム人民戦線運動の波瀾は大會後凡ゆる國々を襲つた。

先づ獨逸の勃興に脅かされた佛蘭西に於いては、大正十一年(一九二二年)十一月以來共産黨は統一戦線結成に活動を續けて來たが、コミンテルン第七回大會前の昭和九年(一九三四年)七月二十七日には同年の二月六日事件以來急激に擡頭したファシズム運動に刺戟せられて共産黨と社會黨との間に統一人民戦線が結成せられ、爾後益々發展して昭和十一年(一九三六年)三月には第二及び第三インター系の大労働組合の合同が成立し、同年四月末―五月の總選挙には國民戦線派に對して人民戦線派は壓倒的勝利を收め、同年六月には社會黨々首ブルムを首班とする所謂人民戦線内閣が成立した。然しながらブルム内閣の入閣要請を拒絶して独自の立場を保持しつゝ、閣外に在つて内閣支持を約した共産黨は人民戦線内閣の微温的態度に推らずして労働者の罷業闘争を全國的に頻發せしめた。斯る情勢は人民戦線派内部に非常な不安を與へ更に同年七月勃發の西班牙内亂に際しての政府の中立嚴守を繞つて人民戦線派内部の對立は次第に激化した。然も國際情勢は伊エ紛争、獨逸の再軍備、ライオンランド進駐等緊迫化しつつあるに際し、國內の左右兩翼の對立は次第に激化し、財政の悪化、フラン貨の不安定、労働争議の頻發等國內不安は増大し其の間幾度となく政變を惹起したが、財政全權委任法案に依る昭和十三年(一九三八年)四月八日の第二次ブルム内閣の瓦解、次いでグラディエ内

開の成立を以て佛蘭西人民戦線は事實上崩壊の第一歩を踏み出したのである。首相グラデーは同年十月急進社会党第三十五回年次全国大会に於て共産黨をば佛蘭西の外交内政を妨害するものであると痛罵し、十一月十日の人民戦線全国委員会に於て共産黨弾劾を聲明して自ら人民戦線を放棄した。而して人民戦線派はグラデー内閣の經濟財政再建案が第一次ブルム人民戦線内閣當時労働者の獲得した一週四十時間労働制並に一週五日間労働制の改変を企圖するや労働者の不滿に乗じて同年十一月三十日全国的に總罷業を決定したが當局の彈壓の下に完全に失敗した。かくてソ聯邦を除いては世界最大と自負した佛蘭西共産黨は其の勢力を激減しコミンテルンの企圖したソ聯邦擁護の人民戦線戦術は完全に失敗して昭和十三年（一九三八年）十二月六日の獨佛共同宣言によつて酬はれたのであつた。

佛蘭西に次いで人民戦線が勝利を占めたのは西班牙である。西班牙に於ける人民戦線運動は昭和九年（一九三四年）十月のアスツリア暴動失敗後その經驗に鑑みて西班牙共産黨が自ら労働組合運動統一の爲めの闘争を開始したのに始まる。爾來共産黨の巧妙な運動の下に人民戦線の結成は成功して、昭和十一年（一九三六年）二月の總選挙には二百六十八の議席を得て過半数を制し、人民戦線内閣（アチャヤ内閣）の成立を見るに至つた。然しなから人民戦線の勝利に對し右翼勢力の反撃は漸次激化し遂に同年七月十八日フランコ將軍の叛起により西班牙領モロッコの一角から反亂の烽火が擧げられ、同月二十五日には國民軍は假政府を組織して、西班牙は内亂の渦中に投ぜられた。ソ聯邦はコミンテルンをして人民戦線派に對し指導者の派遣、財政援助等を行はしめたが、七月の反亂勃發後はそれは更に積極化し、遂にはソ聯邦自體に於て自發的國民運動の形を裝つてはるが公然と西班牙政府軍應援の運動が熾烈化した。然も他方ソ聯邦は佛蘭西第一次ブルム内閣提唱の西班牙内亂干渉委員会に同年八月五日参加し、同委員会に於て獨、伊の内亂干渉の事實を曝露して、其の反政府軍援助を牽制せんと努力したが却つて自己の干渉事實を曝露されたに過ぎなかつた。而して同委員会に於ける激論にも拘らず西班牙内亂に對する諸國の干渉は事實上依然として續けられて行つた。内亂は其の

後、ソ聯邦並にコミンテルンの援助にも拘らず漸次フランコ將軍側の勝利に導かれ昭和十一年（一九三六年）九月二十九日にはフランコ將軍は西班牙國政府首領に就任し、同年中には獨、伊等六箇國より法律上の承認を與へられ、爾後フランコ政權は法律上又は事實上各國から承認を與へられて來た。反之、人民戦線政府は敗退を重ね昭和十四年（一九三九年）二月バルセロナを攻略されて茲に内亂は終結した。抑々西班牙に於ける人民戦線軍の勝利如何はコミンテルン書記長デミトロフが昭和十三年（一九三八年）七月十八日付イズヴェスチャ紙上に「西班牙國民の英雄的闘争二周年を迎へて」と題して「今や事、國際プロレタリアートの問題である。西班牙國民の勝利を確保する爲め我々は凡ゆる犠牲を惜んではならない。即ち労働階級の偉大なる指導者スターリンは西班牙共産黨書記長同志ホセディアスに電文を寄せて、フランスト反動勢力の壓迫下にある西班牙の解放は單に西班牙人個人の問題でなく、それは實に全世界の進歩的人類の共同事業であると述べて居る。全世界の進歩的人類の此の共同事業を實現すること、此れは實に現在の世界情勢下に於ては西班牙國民の援助を意味するのみならず殘忍極まるファシズムの世界的攻撃を阻止し全世界の平和を維持する所以のものである」と述べてゐる通り、世界の人民戦線運動の興廢に影響する處が極めて重大であつて、それはとりもなほさず直接には獨伊に打撃を與へてソ聯邦の國際的地位を改善するか否かに懸つてゐる、さればソ聯邦並にコミンテルンは極力その人民戦線軍を援助したのであつたが、結局人民戦線は敗退を重ねなければならなかつた。

上述の如く佛蘭西に於ては其の内部崩壊によつて、西班牙に於ては國民戦線軍の勝利によつて、人民戦線が敗退したのに對して、支那に於ては人民戦線運動は顯著な成績を挙げたのであつた。コミンテルン第七回大会に於て駐ソ中共代表王明（陳紹禹）は「植民地及び半植民地に於ける革命運動並に共産黨の戦術に就て」の演説で「我が中國共産黨は我が同胞の國民的存在が危機に瀕して居る現在、我が中國の現状を考慮し從前の否定的な又は肯定的な經驗を批判的に攝取した上、反帝國主義的單一國民戦線の方法によつて中國民衆を普遍的反帝抗日闘争の爲め出來得る限り急速に結集せ

しめる爲め、此の運動の最も勇敢な、強力な、廣汎な規模を漸次獲得し、此の反帝國主義的單一人民戦線戦術を今後發
展せしめねばならない」と論じ、又同大會の決議「ファシズムの攻撃並に労働階級の反ファシズム統一の爲めの闘争に
於けるコミンテルンの諸任務」に於て王明の所論と同一趣旨の提言が爲されたが、中國共產黨並に中華ソヴェト政府
が聯名を以て公表した同年八月一日付「抗日救國のため全體同胞に告ぐる書」は「國民黨軍隊がソ區の攻撃を停止し全
部隊を以て抗日戦争に當るなら、彼等が過去に於て又現在に於て紅軍との間に如何なる舊仇宿怨があるとも、又對内的
に如何なる故障あるに拘らず、紅軍は即時敵對行爲を停止するのみならず進んで之と親密に提携し共同救國に當らんと
する」と述べ、更に中國の一切の政黨並に全國民に對し全中國聯合の「國防政府」と「抗日聯合軍」の組織とを提唱し
た。爾來、中國共產黨は新政策たる抗日人民戦線の結成に努力を集中し、殊に華北自治問題を契機とした民衆の反日感
情に對しては極力煽動を行つた結果、抗日救國運動は全國に傳播するに至つた。

惟ふに中國共產黨の新政策の目標は王明が昭和十一年（一九三六年）八月コミンテルン機關誌第十四號登載の其の論
文「支那國民の獨立と自由の爲めの闘争」に於て述べた通り「一般的反帝國主義統一戦線に非ずして日本帝國主義に
對する統一人民戦線」の樹立に在るのであつて、此れは昭和十年（一九三五年）十二月の中華ソヴェト人民共和國主
席毛澤東の内蒙古人民に對する内蒙獨立乃至攻守同盟締結の提議、昭和十一年（一九三六年）三月庫倫に於けるソ蒙相
互援助條約の締結、同年二月下旬の中國紅軍の山西侵入等一聯の事實と共にコミンテルンが其の勢力によつて滿洲及び
北支に於ける日本の勢力を包圍し、以てソ聯邦擁護の役割を果さんとしたものに他ならない。

而して抗日救國の思想は漸次全國に高まつて、蒋介石の國內統一政策と相結ぶに至り、遂に昭和十一年（一九三六年）
十二月十二日の西安事件を契機として國共合作が成立し、其の翌年七月七日支那事變勃發するや全面的抗日運動に發展
し、國民黨のソ聯容共政策の採用は同年八月二十一日のソ支不可倭條約締結となつた。蓋し中國共產黨は國共合作に際

し一應は國民黨に對し戰術的に讓歩したけれども、結局は全國的に活動の機會を得て其の勢力擴大を圖り民衆の指導權
を把握して總ては政權を奪取せんとする野望を遂げんとする好個の地盤を得たものと言ふべく、換言すれば、コミンテル
ンは其の對支工作上一大成功を収めたものと言ふことが出来る。然しながら國共合作は蒋介石の素志ではない。従つて
彼は共產黨の態度には監視を怠らなかつた。かくて國民政府の長期抗日戦（共產黨も之を主張して居る）の展開に伴ひ
共產黨が其の本來の活動を漸次積極化して來るや、國共の對立抗争は頓に表面化するに至つたのである。

濶莫コミンテルンの反ファシズム人民戦線戦術は既に述べた通り一應其の勢威を逞しうはしたが赤色西班牙政府の敗
北、佛蘭西に於ける其の内部崩壊、支那軍の敗北に次ぐ敗北等によつて敗退を重ねるに至り、然も、世界情勢はコミン
テルンの主體たるソ聯邦をして更に其の戦術を變更するの餘儀なきに至らしめたのである。

④「民主主義」憲法の制定

既に述べた如く對外情勢の緊迫化の下に置かれたソ聯邦は第二次五箇年計畫を昭和十二年（一九三七年）を以て超
行裡に終り、昭和十三年（一九三八年）から第三次五箇年計畫に入つて、國力の充實強化、國民の文化經濟生活の好轉
向上が傳へられ、政治的國際的地位の向上を齎らした。

先づ内に於ては國力の強化を圖り、戰時體制を整備せんが爲め、民心の收攬統一、愛國主義の涵養、國家意識の鼓舞、
勤勞精神の鼓吹等一聯の方策、然も個人的慾望を尊重して社會主義國としての特徴を失ひつつあるやの印象を我々に與
ふる方策、更に從來の革命前の露西亞を扶救した態度を更めてソヴェト國家とプロレタリア獨裁とは露西亞發展の
論理的歸結に過ぎないとして帝政時代の偉業を謳歌し其の制度を復活するが如き國家主義的愛國主義的諸方策を進めて
行つた。例へば昭和十年（一九三五年）九月初旬勤勞の刺戟を個人的慾望に求めて開始されたスタハーノフ運動、同年
及び其の翌年の勞農赤軍其の他に於ける階級的身分的特別稱號の設定、昭和十一年（一九三六年）の露西亞歴史の教育

等の如きである。又例へば昭和十年（一九三五年）二月一日の黨中央委員總會に於て突如としてスターリンが提議した選挙制度改正を中心とする憲法民主化問題も此の顯著な實例である。此の問題は爾來諸般の準備を経て昭和十一年（一九三六年）十二月五日の第八回臨時全聯邦ソヴェート大會に於て決定された。所謂スターリン憲法である。

抑々、大正七年（一九一八年）一月三十一日第三回勞・農・兵ソヴェート大會に於て確認されたレーニン起草の「労働被搾取人民の權利の宣言」に始まり、同年七月第五回全露西亞ソヴェート大會に於て決定された所謂一九一八年憲法を経て、大正十三年（一九二四年）一月の第二回全聯邦ソヴェート大會に於て成立し其の後部分的改正の行はれた所謂一九二三年又は一九二四年憲法は、其の制定當時に比較してソ聯邦の國情が社會主義社會建設の進捗に伴つて政治的社會的經濟的に重大な變化を遂げた現在、其の内容が實情に適さなくなつた事が今回の憲法改正の根據となつたのであつて、又其の事實は疑ふべくもない。然し我々の注目を惹くことは唐突として憲法改正に着手するに至つた其の政策的動機である。

即ち新憲法は從來の獨裁主義的色彩を緩和し、民心收攬の爲めに從來採り來つた諸方策を法文化すると共に、從來惡罵の限りを盡して來たブルジョア國の議會主義の平等、直接、秘密選挙を採用したのであつた。又、農民に對しては労働者との間の從來の不平等の待遇を是正した。更に又、信仰の自由を認めて、他方反宗教宣傳の自由を認めながらも從來の戰闘的無神論を以てする宗教彈壓政策を緩和し始めたことも注目し置かう。かくして、例へば從來の「技術が總てを決する」といふスローガンに代ふるに、昭和十年（一九三一年）五月四日スターリンが赤軍大學卒業式の席上述べた「幹部が總てを決する」といふ新しいスローガンに示されたが如く人格を尊重して民心を一新し、從來の如き盲目的な彈壓、強制に依らずしてソヴェート政權に對する國民の心からの忠誠と協力とによつて、生産力の昂揚を圖つて國力の充實を期すると共に、非常時局に際して國內から發生すべき動搖の禍根を絶たんとしたものである。

更に、此のスターリン憲法は其の「民主主義的」なるが故を以て、キーロフ事件を發端として展開された苛酷極まる彈壓政策の結果諸外國に對して失墜した信用の恢復を意圖したものと云ふことが出来る。加之此の憲法改正は例へば世界革命の意圖を明示した規定も削除されて、ソ聯邦の對外政策たる平和政策と歩調を一にしてゐるのである。即ちソ聯邦に對して最大の脅威たるファシズムの攻撃を牽制する爲めには、其の一員たる國際聯盟機構に依る集團的安全保障制の強化は勿論のことであるが、他面自國が恰も民主主義國なるかの如き印象を與へて、英米等民主主義國の間に於ける不信を緩和し、以て夫等諸國との友好關係の持続を必要ならしめた。コミンテルンをして反ファシズム人民戰線戰術を採らしめた所以も茲にあつたのである。かゝる對外的理由も憲法の民主主義的改正を斷行せしめた大なる動機である。現にスターリンは前記第八回臨時ソヴェート大會席上新憲法草案の説明演説に於て「ソ聯邦新憲法は今日ファシズム的野蠻に對し闘争しつつある者の道徳的援助であり、現實的支援である」と述べてゐる。

然しながら茲に注意しなければならない事は、スターリン憲法が民主主義化したと言はれても、ソ聯邦が共產黨に依る一黨獨裁政治の國家であることには何等變更のない事である。スターリン憲法第百二十六條に於て、「労働者階級及其ノ他労働者諸層中ノ最も活動的意識的ナル國民ハ社會主義制度ノ強化及發展ノ爲メノ闘争ニ於テ労働者ノ前衛部隊ヲ爲シ、且ツ労働者ノ凡ニル社會的組織及國家組織ノ指導的核心ヲ爲スソヴェート社會主義共和國聯邦ノ共產黨ヲ結成ス」と規定して共產黨の地位を明示し、同百四十一條に基く選挙規程第五十六條に於てソ聯邦最高ソヴェート代表議員立候補者の推薦權は共產黨の諸機關及び其の外廓團體たる職業組合、協同組合、青年團體、文化團體其の他所定の法規に依つて登錄された諸機關のみ確保されてゐるのである。即ち全聯邦共產黨の獨裁はスターリン憲法に於ても、ソヴェート民主主義の假面の下に堅持されてゐるのみならず、更に強化されてゐることを示すものであつて、前記スターリンの新憲法草案の説明演説に於ても此の事は確言されてゐる。

敘上の如くスターリン政権は諸般の民心收攬策を講じたのであるが、然も他方、或は昭和十年（一九三五年）には黨の外部團體たる「老ボルシェヴィキ協會」を解散せしめ、或は間斷なく清黨を行ひ、或は反政府運動に對しては假藉なく之を摘發して革命の元勳ジノヴィエフ、カメネフを始め幾多知名の革命の闘士を極刑に處する等、反スターリン派の掃蕩を行つてスターリンの下に全聯邦共産黨の統制を強化すると共に、其の摘發した反政府事件に於ては常にソ聯邦の當面の脅威たる獨逸及び日本の陰謀を宣傳して、國民の注意を對外問題に向けしめ、以て現政権の強化と戰時體制の整備とに利用したのである。即ちキエフ暗殺事件を契機として昭和十一年（一九三六年）にはジノヴィエフ、カメネフ一派の合同本部事件、トムスキイの自殺、ケメロウオ炭坑爆破事件が曝露され、昭和十二年（一九三七年）にはビヤタコフ、ラデツク、ソコロニコフ一派の並行本部事件、西部シベリヤ陰謀事件、ガマルニクの自殺、ゾバリン、ルイコフ、ヤゴダ一派の右翼反對派事件、トハチエスキイ元帥等八人の將官の賣國陰謀事件等々更に翌年へと陰謀事件に次ぐ陰謀事件の嵐であつた。世界を驚かした三等大將リエンコフの越境は昭和十三年（一九三八年）六月の出来事である。

④ 反共輻輳の結成

前述の如く内に於て戰時體制の強化に邁進したソ聯邦は、外に對しては國際聯盟加入後も其の平和政策を以て進み、國內に於ける憲法の民主化を始め一聯の民主主義的政策の施行によつて恰も民主主義國なるかの如く宣傳し、先づ對獨關係を繞つて英佛等民主主義諸國との友好關係を強化することに成功し、更に日、獨、伊等所謂現状打破國に對して國際聯盟機構に依る所謂現状維持國の統一戰線の形成を策した。然しながら此の間、コミンテルン第七回大會に於て公然と世界革命の方針が討議されるや、英、伊、米、日等から此れに對し嚴重な抗議が發せられ、就中ウルグワイは國內に於ける治安上の必要を理由として對ソ外交關係を斷絶したのであつた。昭和十一年（一九三六年）三月一日スターリンは米國記者ハワードとの會談に於て、「ソ聯邦は未だ嘗て世界革命の計畫乃至意圖を有したことはない。」「我々マルク

ス主義者は諸外國に革命が起るものと考へてはゐるが、革命は此等の諸國の革命家はその可能性と必要性和を見定めた場合にのみ發生するものである。革命の輸出は無意味である。各國が革命を欲する場合は之を起し、欲しなれば發生しない。例へば我國が革命を欲したが故に之を起したのと同様であり、今や我々は新しい無階級の社會を建設してゐる。我々が諸外國の内政に干渉して革命を起さんと欲して居るかの如く確信するのは何等根據を有するものではない」と述べて其の平和政策の裏付を行つてゐる。

要之、ソ聯邦が最も脅威を感じ警戒を怠らなかつたのは東に於ては日本、西に於ては獨逸であつた。昭和十二年（一九三六年）十一月二十五日には日獨防共協定が成立した。ソ聯邦はこれに對し狼狽しつつも同協定は軍事協定を隱蔽せんが爲めに發表されたもので其れはソ聯邦のみならず英、米等をも脅威するものであつて、これに對してはソ聯邦の政策即ち效果ある平和擁護、集團的安全保障制度の設定強化政策こそ唯一の正しい政策であるとなして宣傳に努めたのである。

先づ日ソ關係を見るに昭和十年（一九三五年）三月二十三日に北鐵護渡の協定が成立したが其の後もソ滿國境に於ける紛争は極東赤軍の軍備擴充と相俟ち漸く激化するに至つた。ソ聯邦は極東の軍備を強化すると共に昭和十一年（一九三六年）三月にはソ蒙相互援助條約を締結し、同時に中國共産黨をして、抗日人民戰線の樹立に努力せしめる等の舉に出でた。然も他方ソ聯邦は機會ある毎に不可侵條約の締結を提議し來つたが日本は此れに對して先づ國境軍備の問題、國境劃定委員會並に國境紛争調停委員會の設置、漁業問題、北樺太利權問題等の解決を主張した爲め何等纏る所なく、かゝる内に昭和十一年（一九三六年）十一月の日獨防共協定の成立を見るに至つた。爾來日ソ間の空氣は昭和十二年（一九三七年）の乾倉子島事件の發生等益々緊張の度を加へつつ、同年の支那事變發生後も昭和十三年（一九三八年）の張鼓峰事件昭和十四年（一九三九年）のノモンハン事件等一觸即發の危機を孕んで行つた。

他方、ナチス政權獲得以來反共を旗印とした獨逸は從來の極權を打破し、興隆の勢を示し、其のソ聯邦に對する露骨な領土的野心の表明はソ聯邦の神經を著しく刺戟した。獨逸秘密警察ゲシュタポの策謀に依ると爲した合同本部事件の翌月たる昭和十一年（一九三六年）九月のミュンベルグに於ける第八回ナチス黨大會の對ソ宣言は共產主義の害惡に對する世界の輿論の喚起に努めたものであり、同年十一月には日獨防共協定が締結された。これに對してソ聯邦は合同本部事件に引續くケメロウオ炭坑事件、ソ聯邦在住獨逸人技師の大量逮捕、並行本部事件、赤軍幹部隠謀事件の摘發等に依る獨逸の對ソ隱謀の暴露、昭和十一年（一九三六年）十一月二十五日開會の第八回臨時全聯邦ソウエート大會に於けるソ聯邦幹部の反ファシズム宣戰、コミンテルンを動員しての反獨的行動等を敢行し、其の間、西班牙内亂に於ける角逐等もあつて獨逸は彌が上にも險惡化した。日獨防共協定に對しては昭和十二年（一九三七年）十一月には伊太利も參加した。爾來獨逸は此の協定の直接間接の援助下に昭和十三年（一九三八年）三月には獨逸合併、同年十月にはミュンヘン協定に依るズデーテン地方合併に成功した。

蓋しソ聯邦の凡ゆる努力にも拘らず、赤色西班牙政權の敗北、支那の敗退、日獨伊等防共樞軸國家の齟齬すべき進出、これに對する國際聯盟の無力化、更に昭和十三年（一九三八年）九月のミュンヘン協定前後に於ける英佛の獨逸接近策等はソ聯邦をして愈々孤立化を餘儀ならしめたのである。加之ソ聯邦を除外しての獨逸英佛によるミュンヘン協定は明かに四箇國に依るソ聯邦圍攻政策を意味する。又獨逸合併から當然發展すべきチェッコ問題は、チェッコを足場として佛蘭西、西班牙へと伸びて居たコミンテルンの勢力を完全に切斷することとなり、更に問題はソ聯邦の恐れてゐたウクライナへ直に波及する虞がある。既述の如くコミンテルンの人民戰線戰術の敗退は自明の事となつた。

かゝる折柄、昭和十三年（一九三八年）十一月七日の第二十一回革命記念日にコミンテルン書記長デミトロフは「國際階級階級の反ファシズム合同戰線」なる新綱領を發表した。然し此の事は既に同年二月イワノフの質問に對する返答

に於てスターリンが「レーニン主義は資本主義制度復活の危險から完全に脱する意味に於ける社會主義の最後の勝利は國際的範圍に於てのみ可能であると教へて居る（第十四回全聯邦共產黨大會の決議を見よ）。此れは即ち、一國內社會主義の最後の勝利は國際プロレタリアートの眞摯な助力に依つて始めて可能である事を意味するものであつて、勿論我々自身は徒らに拱手傍觀して只國外の助力を待つべき事を意味するものではない。反對に國際プロレタリアートの助力と相結んで國防力を強化し、赤軍、赤海軍を増強し、全國を動員し、以て資本主義國家の武力攻略、資本主義制度復活の危險と戦ふべきである」と明言して居る所である。而して此の新綱領はミュンヘン會議後に於けるソ聯邦の國際的孤立を救済せんが爲めに、コミンテルンをして從來の人民戰線戰術の強化工作を行はしめ、ファシズム侵略國を制御することを得べくして然も伊太利ファシズムにエチオピアを、獨逸ファシズムにオーストリア及びチェッコを蹂躙させて裏切つた英佛をも從來の日獨伊と共に其の戰術的目標に加へて、國際階級階級に依る強力な統一戰線を結成せしめて、「ファシスト侵略者や戰爭誘發の元兇を制壓して其の國の民衆と共同して其の國に於けるファシズムを打倒」せしめんとするに在るのである。全聯邦階級組合が國際階級組合（舊アムステルダム・インターナショナル）に加入せんとして同年五月十八日國際階級組合理事總會の表決によつて拒否されてゐる事實と考へ合はせると誠に興味あるものと言ふべく、然もコミンテルンは其の後も尙第二インターナショナル及び國際階級組合に對して行動統一設定の提議を行つてゐる。而してかかるコミンテルンの新戰術はソ聯邦がミュンヘン協定後通商交渉に依る獨逸接近を企圖したことと表裏を爲すものである。

然しソ聯邦がかゝる努力を繰返しつつある内にも國際情勢は刻々と進展し、獨逸は更に昭和十四年（一九三九年）三月にはチェッコの合併、スロヴァキヤの保護領化に成功し、同年六月二十二日には獨逸同盟を締結した。かゝる獨逸の著しい進出に對して獨逸を包圍すべく英、佛はソ聯邦と共に軍事同盟を締結せんとしたが、獨、伊對英、佛間の戰爭勃

發の見透をつけ、戦争に依る其の国力の疲弊に乗せんと野望を有したスターリンは俄かに之に應ぜず、かゝる内に同年八月二十三日獨ソ不可侵條約が締結されたのである。

第五章 獨ソ不可侵條約締結から獨ソ戦勃發前迄

(一) 獨ソの提携

昭和十四年(一九三九年)八月二十三日の獨ソ不可侵條約の成立は緊迫した歐洲情勢に一大波紋を投じ世界を嘩然たらしめた。而して英、佛の對獨強硬態度を前に、此の獨ソ提携によつて對ソ戦の脅威から完全に解放された獨逸の波蘭に對する強硬態度は遂に同年九月一日の獨波戦を勃發せしめ、更にそれを契機として同月三日英、佛對獨の國交は破れた。即ち獨ソ不可侵條約成立によつてスターリンが投げた一石が遂に二十五年目に歐洲を戦亂の渦中に投じたわけである。爾來、獨逸の勢力は歐洲を席捲したが、昭和十五年(一九四〇年)六月十日には伊太利も參戰し、同年九月二十七日には日獨伊三國同盟が成立して、此れに對し同年十一月にはハンガリー、ルーマニア、スロヴァキア、が翌年三月には勃牙利も參加するに至つた。

ソ聯邦に於ては此の間、戦争に介入することなく然も獨逸の動向に注意すると共に列強の戦争による疲弊と間隙を衝いて對外政策に出づべく、内に於てはスターリンの獨裁下に専ら軍備の充實、國防資源の開発、勞働總動員等其の高度國防國家體制の強化に邁進したのである。而して國民に對しては「祖國の爲めに」、「祖國を守れ」のスローガンによつて其の愛國心の昂揚に努め、ピョートル大帝、エカテリナ大帝、クツィゾフ將軍等帝政露西亞時代の皇帝、名將然もツァールに仕へた歴史的人物の功績を稱揚して其の民族感奮に訴へ國家觀念の注入に餘念がない。我々は其の政策の内にソ聯邦が社會主義國家と稱しながら、實は封建的な專制權力に率ゐられた帝國主義國家に他ならない實體を益々露骨に

現はしてゆく姿を見るのである。露書記長スターリンは昭和十六年(一九四一年)五月には人民委員會議長に就任して政府と黨との單一化を圖り、名實共に獨裁者となつた。

次に外に對しては、從來の集團安全保障體制支持、對日獨伊樞軸反對の立場から國際聯盟機構に參加して英佛と歩調を合せてヴェルサイユ體制を支持したソ聯邦は反共を叫んだ獨逸と提携するや、九月十七日には波蘭在住の虜げられてゐる白系露西亞人及びウクライナ人に對し同胞としての援助を與ふることは其の義務であるとして一齊に波蘭領内に進撃を開始し、同月二十八日には獨、ソ間に於て波蘭の分割協定を行つた。茲に我々は、大正十年(一九二〇年)の露波戦争に於て見られた軍事的侵略を通じて世界革命を促進するといふソ聯邦の企圖を想起するのである。又、戦雲の陰に隠れて愈々赤色帝國主義的野望を露はし昭和十五年(一九四〇年)三月にはカレリヤ地方の芬蘭からの奪取、六月にはベツラビヤ等の羅馬尼からの奪取、七月にはラトヴィヤ、エストニア及びリスアニアの併吞等漸次侵略の觸手を伸ばして自國勢力圏の擴大に努力し始め、更に獨逸の工作をバルカン、トルコ及びユーゴスラヴィアに於て阻むに至つたのであるが、其の結果は遂に昭和十六年(一九四一年)六月二十二日の獨ソ戦勃發となつたのである。尙其の間、昭和十六年(一九四一年)四月十三日には日ソ中立條約が成立した。

抑々獨ソ不可侵條約はソ聯邦をして其の最大の脅威であつた獨逸との戦争の危機を解消せしめ、日獨伊防共協定の重歴から解放せしめたものに他ならない。然しながら從來執拗に自らも叫び、又コミンテルンを動員して惡罵の限りを盡さしめて來たフアンスト獨逸との提携、然もその後、弱少國家侵略の事實は、これに對するソ聯邦當局の理論付にも拘らず、從來の其の言動を裏切るものである。否、我々は外に對しては平和政策を強調し、内に於ては一國社會主義建設に邁進して來たソ聯邦が今や国力の充實を待んで歐洲情勢の急變と共に其の平和政策の假面を脱いで赤色帝國主義の正體を曝露して來た事實を見ないわけには行かないのである。近くはズデーテン問題にせよ、チエッコ問題にせよ、

獨逸がフランスの進撃に對し英、佛を批難したその英、佛の役割を波蘭に獨逸を進撃せしめて演じ、然もその分前を得たソ聯邦なのである。而して此の事實は何も目新しいことではないのであつて、嘗て昭和十一年（一九三六年）三月ソ蒙相互援助條約を締結して外蒙古を保護領化した際、南京政府の抗議に對しソ聯邦は實力のない者に代つて之を保護するのであつて、支那政府は寧ろ之に感謝すべきであると答へた事實は既に我々の見てゐる所である。即ちソ聯邦は從來對外的には強國に對しては其の赤色帝國主義的野望を強行して戦争に介入する危険は極力之を避くると共に、弱少國家に對しては列強の干渉の虞のない場合に於ては其の野望を遠うして世界侵略の一步前進の途を歩んで來てゐるのである。

ソ聯邦が獨ソ不可侵條約を締結した理由は昭和十四年（一九三九年）八月三十一日の臨時ソウエート最高會議に於けるモロトフ外務人民委員の報告演説に依れば、ソ聯邦はソ聯邦の國民及び國家の利益のみを考へてゐる事、世界觀及び政治制度の相違は兩國の友好關係樹立の障害とはならない事、兩國の接近が歐洲に於て起り得べき軍事的衝突の戦野を狭めるか、又若し軍事的衝突が避け得ないとしても局限し得る事等にあつた。即ち其の述べられた戦争反對或は平和政策は畢竟するに資本主義諸國間の戦争に就て言つてゐるのではなくして、ソ聯邦が戦争の渦中に捲き込まれることを極力避けることにあるのである。而して資本主義諸國間の戦争に就ては、戦争勃發の危機に直面した現在、ソ聯邦としては其の世界赤化―侵略の前進の爲めには寧ろ其の勃發を望み、資本主義諸國をして相互に相争はしめ、之を擴大遅延せしめて其の國力の疲弊の間隙を衝くことが賢明の策なのである。さればソ聯邦はコミンテルンをして展開せしめた反ファッショ人民戦線運動に拘泥せず其の對外政策を大轉換して對獨接近を具體化して自己の戦争の脅威を除去すると共に、第二次歐洲戦争勃發の契機を作つたのである。かくてこれが爲めソ聯邦の別働隊たるコミンテルンは必然的に其の戦術の修正を行ふに至つた。

②純正人民戦線

獨ソ提携に對しては各國共產黨は之を歓迎した、續く第二次歐洲戦争に對しては各國共產黨は始めは自由を擁護し民主主義を確保しファッショ獨逸を潰滅せしめる爲め武器を以て起つべしと戦争支持を聲明した。例へば英國共產黨は九月二日の宣言に於て「ファシズムに對する民主主義の勝利の爲めに一切の手段を盡して之を支持する」と戦争支持の態度を執つたのである。然しながら其の直後米國共產黨は此の戦争は帝國主義に基く戦争であり、其の責任は交戦國双方の資本家支配階級及び地主階級に在るのであつて、反ファシズム戦争でもなければ、正義の戦争でもなく、又弱小國家を防御する戦争でもないが故に、労働階級として支持すべからざる戦争である旨の宣言を發表したのであつて、戦争に對する態度に就てコミンテルン陣營は一時混乱を呈した。其の後、コミンテルン書記長デミトロフは第二次歐洲戦争に對する統一的態度に就いて表明する所があつて、前述英國共產黨は十月七日に前記九月二日の宣言を訂正して「現戦争は正しい防御戦争でなくして英、獨が植民地及び世界的覇權を掌握せんとする正しからざる帝國主義戦争である」と聲明したのであつた。

デミトロフは「戦争と資本主義國家の労働階級」（昭和十四年―一九三九年コミンテルン誌八一九月號所載）に於て「今次戦争は其の本質からして明白に帝國主義戦争であり、不正な戦争」であつて世界再分割を企圖し世界制覇を目的とする帝國主義的ブルジョアジーによつて遂行されてゐるのであつて、從來伊、獨、日を侵略國とし、米佛英を非侵略國とした區別は實情に合致せず、今や英、佛兩國が最も積極的な戦争遂行者となつたと強調し、獨逸の反ボルシェヴィズム運動を支持して獨ソ戦争を勃發せしめんと企圖した英、佛は獨ソ不可侵條約の締結によつて其の期待が全然裏切られたので波蘭擁護の口實の下に對獨戦争を開始し、民主主義ファッショの戦争とか、ヒトラー主義への戦とか、民衆の自由の爲めの戦争等と宣傳して戦争目的と偽裝し數百萬の民衆を戦争に驅り立てんと努力してゐる現在に於ては、労働階級

に殘された唯一の正しい道は從來の帝國主義戰爭排撃、戰爭煽動の防止の任務に在るに、戰爭挑發者たる支配階級に對する闘争によつて今次戰爭の帝國主義的本質を曝露して、戰爭を停止せしむることであると論じ、更に、人民戦線運動は現在に於ても支那、其の他の植民地並に隷屬諸國家の如く民族解放闘争を行ひつつある國に於ては未だ完全に適用され得る戰術であるが、其の他の國家に於ては、國際情勢の變化、労働階級の新任務の展開、管ての人民戦線派の首腦部が現在に戰爭指導階級になつて居るが如き事態の到來の爲めに、此の戰術は戰爭開始前に行はれたが如き形態に於ては最早不適當のものとなつて來たが故に、現在に於ては労働階級、農民、都市の小市民、進歩的知識階級の結合のみが、下からの力を以て帝國主義者の陣營に参加した、社會民主黨及び其の他の小ブルジョアの民主主義政黨の突刃に對抗して、戰爭反對、資本主義反對の闘争を領導する眞の統一人民戦線を實現することが出来る、と述べてゐる。所謂純正人民戦線である。これは即ち、コミンテルンが從來の反ファツシヨ闘争を拋棄して、反戰闘争に集中し、戰爭支持者となつた社會民主主義者等と決裂したものである。

此のコミンテルンの戰術の轉換は實に赤色帝國主義の野望を藏するソ聯邦の對外政策と表裏をなし、既に屢々述べた通りコミンテルンが其の一機關に過ぎざることを餘りにも明瞭に露呈したものと云ふべきであつて、殊に戰爭に對する態度に就ての其の陣營の當初の混亂は假令、時的とは言へ此の事情を裏書きするものである。即ち其の謂ふ所の「帝國主義戰爭反對」が對波蘭戰、對芬蘭戰の如きソ聯邦の行ふ戰爭に對するものではなくして、ソ聯邦に對して行はるる戰爭反對の意味に他ならず、各國の労働者をしてソ聯邦に奉仕せしめ、其の行ふ赤色帝國主義の進路を容易ならしめんとするに在ることは言ふ迄もないことである。而して此の純正人民戦線運動は戰爭が長期化の様相を呈するや、漸次積極化して、戰爭によつて壓迫された大衆の日常生活の防衛闘争を通じて、労働者、農民の組織化、中間層の獲得へと進展して、國內擾亂を企圖した。然しながら複雑な國際情勢下に處してソ聯邦の對外政策が列強を相争はしめて其の疲弊の間

隙を衝く方針の下に微妙な歩みを續けた此の期間に於けるコミンテルンの活動が國共合作の支那を除けば、表面的には英、米共産黨の合法的活動が目立つて、獨、伊其の他の樞軸國內に於ては消極的な感のあるのは故なしとしない。

尙、茲に注意すべきは全聯邦共産黨及び中國共産黨を除いては世界最大の支部である米國共産黨が、米國政府の國際的政治組織を禁止する法律發布の對策として、昭和十五年（一九四〇年）十一月十六日コミンテルンを脱退したことがある。此れはコミンテルンの了解の下に行はれ且つ、コミンテルンと事實上不可分たるべきことを替つてはゐるが、其の第七回大會の決議に既に見られる通り世界革命の國際指導性を放棄したコミンテルンが更に其の誇る鐵の規律を自ら蹂躪したものであつて、ソ聯邦の利用するまゝにコミンテルンそのものが衰亡して行く姿を物語るものである。

唯、支那に於ては反ファツシヨ人民戦線戰術は「反帝國主義的單一國民戦線」の形に於て一應の成功を収めたのである。而してコミンテルンは歐洲革命が獨伊樞軸によつて妨げられたが爲めに主力を東亞革命の達成に注ぐこととなつたものの如く、國民黨内の對日和平には極力反對を煽動して持久抗日戰に誘導し、他面中國共産黨の勢力擴大を企圖したのであるが、結局は國共相剋を招來して國共分裂の危機を傳へられつつも、蔣介石の實權掌握下に抗戰を持続せんとする重慶政府の中共との提携の必要と中共の戰爭長期化の方針とは其の重合を繼續せしめたのであつた。昭和十五年（一九四〇年）三月には和平反共建國の國民政府の誕生を見て、汪主席領導下に南京に遷都を了し、同年十一月三十日には日支國交條約の締結を見たが、國共合作の重慶政府は敗戦に敗戦を重ね、國際情勢の變化によつて其の恃みとする援蔣勢力の渺々しくないにも拘らず、執拗にも日本に對する抗戰を繼續したのである。而してコミンテルンはかゝる方策を以てソ聯邦の對外政策に奉仕したのであるが、日ソの國交阻害を恐れるコミンテルンは何等實效ある援助を之に對して與へてゐない。却て昭和十六年（一九四一年）四月十三日には日、ソの間に中立條約が締結せられて、中國共産黨は立場に窮するに至つたのである。

然しながらソ聯邦は自ら戦争の渦中に投ずることを極力避けつつ、其の赤色帝國主義の野望を遂げんとする夢想が獨逸の急速な勝利の爲めに挫折した爲め、昭和十五年（一九四〇年）末頃から漸次反獨逸的態度を採るに至り、更にコミンテルンをして従來の控へ目であつた反ナチス宣傳から一轉して、獨逸國內のみならず其の占領下の歐洪各國に對して用意周到に巧に工作を行はしめたが、此の工作は赤軍の獨逸東部國境其の他の方面への集結と相俟つて遂に獨逸をしてソ聯邦に對し宣戦を布告せしめることとなつた。即ちソ聯邦は遂に自ら蒔いた種を自ら刈り取るべき運命に達着したのである。

第六章 獨逸戰勃發からコミンテルン解散迄

(一) 獨逸の國交斷絶

昭和十六年（一九四一年）六月二十二日獨逸は突如ソ聯邦に對して宣戦を布告した。ソ聯邦は開戦と共に、内に於ては「一切を擧げて戦線へ」のスローガンの下に、軍事、政治、經濟等全般に亘つて戦時體制を敷いて戦争に邁進した。開戦直前の五月人民委員會議長に就任したスターリンは六月末には新設の國家國防委員會議長に就任し、七月には國防人民委員をも兼務し、更に後にはソウェート軍最高總司令官にも就任し名實共にソ聯邦の獨裁者となつて、自ら凡ゆる機會に祖國の危機を叫んで、ソ聯邦の一切の民族が一丸となつて祖國の名譽と自由とを護りファシスト獨逸を潰滅する爲めの一大解放戦を遂行すべき旨を強調し、ファシズムに對する敵愾心を激發して愛國熱の昂揚を圖つた。即ちソ聯邦は國民の總動員とスターリン政權の強化とに全力を注ぎ、共產主義的言辭は影を潜めて、獨逸戦を「第二祖國戦争」と名付け、從來「ソウェート聯邦」なる言葉と矛盾すると禁ぜられてきた「露西亞」なる言葉を獨逸軍が十月莫斯科近郊に迫つた時以來使用し始めて、國民に對しヒトラーの戦争目的は共產政治打倒ではなく、國家としての露西亞領土の

占領及び露西亞國民の奴隸化に向けられてゐることを強調し、親衛隊の如き帝政露西亞時代の傳統を復活し、當時の英雄を顯稱する等國民の民族感情に訴へて、露西亞愛國主義を鼓吹すると共に、全聯邦共產黨及び其の指導者の功績を宣傳し、イワン皇帝、ピョートル大帝の後繼者にスターリンを擬する等專制權力の強化を圖つた。又英、米との聯繫を強化する意圖をも含めて反宗教刊行物を一切閉鎖し、寺院を再開し、寺院に於けるソ聯必勝祈願祭を許し、更に戰闘的無神論者同盟議長ヤロスラフスキイをして億面もなく獨逸新教徒のカトリック信者迫害を非難せしむるに至り、更に昭和十七年（一九四二年）十一月設置の獨逸の暴虐行爲による損害の査定並に調査に關する國家特別委員會には其の委員に僧侶を任命する等國民の宗教感情を利用して精神總動員と政權擁護に資してゐる。而して之等の諸方策は在外自派露人に對しても反響を興へてゐるのであるが、我々はかかる諸方策の中に社會主義國家としてのソ聯邦の面目を今や認めることが出来ないのである。

次に、外に對しては従來獨逸と結んで敵視した英、米と結んだが、他方全スラヴ民族大會を開催して占領地スラヴ國民の對獨憎惡感情を煽つた。汎スラヴ主義は既に獨逸戰前のソ聯邦のバルカン工作に現はれ始めたのであるが、これはスラヴ諸國民にソ聯邦が帝政露西亞の後繼者としてスラヴ諸國の保護者たるの役割を果すものとの感を抱かしめんとするもので、獨逸戦はスラヴ對ゲルマンの民族闘争であつて全スラヴ國民の利害は完全に一致すると強調するところがあつた。又スターリンは昭和十六年（一九四一年）十一月の十月革命二十四周年記念祭に於て、ソ聯邦の戦争目的はソ聯國民のみならず歐洲のスラヴ民族其の他奴隸化された國民の解放闘争に助力を興へんとするものであつて、戦後の秩序は各國民の欲する所に從つて決定すべくソ聯邦のそれを強制する意圖は毫もないと述べてゐる。然もソ聯邦は次に述べ

る如くコミンテルンをして其の戦術を轉換せしめて之をソ聯邦の擁護に動員したのである。

コミンテルンは獨逸戰勃發と共に戦争に對する態度を一變して全面的ソ聯邦援助の側面工作に移行して、再び反ファ

ツシヨ人民戦線の昔に還り、フアシズムと戦ふものは観念を超越して選ぶ所なく一切のものと提携せんとした。即ち米國共産黨は既に述べた通り獨ソ提携成るやコミンテルンの方針に則して反フアツシヨ人民戦線運動から帝國主義戦争反對に轉向し政府の親英佛政策に反對を唱へたのであつたが、獨ソ戦勃發するや六月二十八日其の領袖ワイリヤム・フオスターの演説に見られる如く、再度の轉向を行つてソ聯邦擁護を目的とする反フアシズム運動を展開すると共に政府の親英佛、反極端政策を支持するに至つた。英國共産黨も同様に七月六日の宣言に於て従来の對戦態度を一變して英、ソの協同とフアシズムに對する民衆の國際戦線の結成を叫んだ。又中國共産黨は七月二十八日及び二十九日の兩日其の「出路及迷路」と題する論文に於て「國際反フアシズム戦線を擁護し中ソ英米聯合體を促進すべし」と述べてゐる。此の戦術の轉換はコミンテルンがソ聯邦の一機關たることからして當然なことである。而して現にコミンテルンの指導者スターリンは昭和十六年（一九四一年）の十月革命二十四周年記念祭に於て「レーニン」は戦争を二種に分つて侵略戦争即ち不義の戦争と解放戦争即ち正義の戦争とした。獨逸人等が現在行つてゐる戦争は侵略戦争であり不義の戦争であつてその目標は他國の領土を奪取し他國民を征服することにある。されば凡そ良心ある人々が獨逸侵略者を敵として悉くこれに對して蹶起すべきは當然である。ヒトラー獨逸と異りソ聯邦並に其の同盟諸國の行つてゐる戦争は解放戦争であり正義の戦争であつてその目標は歐羅巴並にソ聯邦の奴隷化された諸國民をヒトラー一味の暴虐から解放することにある。されば凡そ良心ある人々がソ聯邦、大英帝國並に其の他の同盟諸國の軍隊をば解放を齎す軍隊として之れを支持すべきは當然である」と叫んでゐる。英國はソ聯邦と同盟したが故に其の對獨逸は侵略戦争から解放戦争に變化したのである。洵にソ聯邦本位の御都合主義の論理と言はざるを得ない。

尙、コミンテルン誌昭和十七年（一九四二年）八、九月號に於てワイツシャーは「人民戦線より汎國民戦線へ」と題して「フアシストに對し國民が大戦争を展開してゐる今日、人民戦線は灰の中から蘇生した神話の鳥の如く、國民の解

放と獨立のための闘争と言ふ國民戦線の形態をとつて復活した」と述べてゐるが、此れはコミンテルンの戦術の轉換と言ふよりは寧ろ、正直にコミンテルンの生ける屍を曝したものと云ふべきである。

爾來、ソ聯邦と同盟關係にある英、米等諸國の共産黨は共産主義本來のスローガンを掲げることなく、政府絶対支持の態度を表明し、ソ聯邦に對する十字軍編成の中心たるヒトラー打倒の爲めに總動員態勢を採る必要を力説すると共にソ聯邦援助を強化すべくソ聯邦の要望たる第二戦線の急進なる展開を要望したのである。其のスローガンに先づヒトラー打倒を掲げるに止めて日本に觸れて居ないのは日ソ關係に就いて極めて慎重なソ聯邦の態度（大東亞戰勃發の際日本を獨逸と同じく侵略者であると爲したが其の他は對日態度を慎重にした）に倣つたものと云ふべきであらう。此れに對して英、米政府は國民統一及び對ソ提携等の政策的見地から其の黨勢擴張の裏面的活動を警戒しつゝ、共産黨の活動を容認し政府への協力を期待した。例へば、嘗て共産主義運動に對する取締を強化した米國に於ては昭和十六年（一九四一年）三月二十三日旅券申請違反の廉に依つて監禁四年の刑に處した米國共産黨中央委員書記長ブラウダーを其の翌年五月十七日其の刑期の満了せざるにも拘らず釋放して國民統一に協力せしめた。英國に於ては昭和十七年（一九四二年）二月シンガポール陥落直後、親ソ派を代表する前駐ソ大使クリックスを入閣せしめ、或は七月には印度共産黨の結社禁止を解除して其の祖國擁護の誓を爲さしめたのである。然し此等の共産黨は表面的には専ら政府に追隨しつゝ、裏面に於ては依然として執拗な活動を繼續してゐるもの如くである。

獨、伊を始め極端國並に其の占領地等に於ける共産黨も上記の如きコミンテルンの戦術の線に沿つて活動を行つた。即ち從來排撃してゐた倫敦の亡命政権との共同戦線さへも主張してフアシズムの打倒、或は民族の獨立を強調して反戦闘争を行ふと共に反極端陰謀、テロ工作、産業破壊、バルチサン運動、謀略活動に全力を注いで背後撈亂による極端國の戦力消耗を企圖し、ソ聯邦擁護に狂奔したのである。

尙、支那に於ては獨ソ戰勃發後國際反ファシヨ統一戦線を採擇した中國共產黨は其の後昭和十六年（一九四一年）十二月八日大東亞戰勃發するや、其の翌日コミンテルン公式に従つて日本を不信な侵略者と宣言し、重慶政府の對日宣戰を全面的に支持すると共に、太平洋を繞る日、鮮、蒙、安南等の一切の抗日民族統一戦線の結成を強調するに至つた。傳へられる國共相剋の原因には、其の後ソ聯邦擁護の立場から樞軸の中心たるファシスト獨逸の擊滅を第一義とし、太平洋戰爭を第二義的に取扱つた中國共產黨の態度も一因を爲してゐる。尙昭和十七年（一九四二年）七月七日の其の「抗戰五周年宣言」に於て戰後の中國は當然ソヴェートの或は社會主義的てなく、民主的中國であると語つてゐるのは注目すべきであらう。

此の間、防共陣營に於ては昭和十六年（一九四二年）十一月二十五日には日、獨、伊、滿、洪、西間に防共協定の延長が決定し、羅馬尼、勃牙利、スロヴァキア、クロアチア、芬蘭、丁抹及び南京國民政府の同協定への加入を見た。十二月八日には大東亞戰爭が勃發し、茲に世界は樞軸國對反樞軸國の一大戰爭渦中に投ぜられた。而してソ聯邦が再三要望した歐洲第二戦線結成を内容とする英ソ相互援助條約と更に物資援助をも含む米ソ協定は夫々昭和十七年（一九四二年）五月六月の交に締結された。爾來、獨ソ戰の戦局は持久戰の様相を呈して今日に至つてゐる。

(2) コミンテルンの解散

本年五月米國大統領特使デヴィスの莫斯科訪問直後の同月二十二日に突如としてコミンテルン解散に關する同執行委員會幹部會の決議の提案が同月十五日付を以て發表された。

コミンテルン解散決議の提案要旨は次の通りである。

「各國の内政及び國際情勢の複雑化に伴つて、何等かの國際的中心勢力が各國の勞働運動の任務を決定することは克服し難い障礙に逢着すべきことは既に戦前から明か」となつてゐたのみならず、「コミンテルン第一回大會に於て定めら

れた勞働者團結の組織形態は勞働運動更生の初期の要請に適應したものであつたが、各國に於ける勞働運動の成長と共に任務の複雑化に従ひ益々無用のものと化し、國民的勞働黨將來の爲めの障礙とさへなつた。コミンテルンは既に其の第七回大會に於て執行委員會に對し「各國の具體的狀況と特殊性を考慮し原則として各共產黨内部の組織事業に直接干渉すべからず」と決議したが、其の後同様、米國共產黨のコミンテルン脱退を容認したのであつた。今やコミンテルンの歴史的任務は終り、各國共產黨は政治的に成長を遂げ、更に又「今次戰爭中多數の支部からコミンテルンの解散問題を提起して來たのに鑑み」、第一インターナショナル解散の経緯に倣つて、コミンテルンを解散すると言ふのである。而して決議文の最後に「コミンテルン執行委員會幹部會はコミンテルンに味方するものに對し、全力を擧げて勤勞者の不倶戴天の敵獨逸ファシズム及び其の諸同盟國並に所屬國の速かな打倒の爲め、反ヒトラー同盟各國家及び各民族解放戰を全面的に支持し、これに積極的に参加することを呼掛けるものである」と宣言してゐる。

而して同提案は各支部の賛成を得て六月八日の最終幹部會に於て、六月十日以降コミンテルンを解散しデミトロフを議長とする委員會に其の清算事務を委任した旨の決定が、六月九日付でデミトロフの名に於て發表された。

此のコミンテルンの解散は其の發表に依れば各支部の一致の賛成を得たものの如くである。既にコミンテルンを脱退してゐる米國共產黨（書記長ブランドーはコミンテルン解散に賛成してゐる）は別として、英國共產黨は五月二十四日の中央委員會で賛意を表し、中國共產黨は同月二十六日の黨幹部會議及び中央政治局會議に於て同意を表明してゐる。然し何れにせよ此の事は異分子の排除と財的援助とによつて全聯邦共產黨の統制の充分利いてゐる各國共產黨の事であるから當然の事であらう。

昭和十年（一九三五年）七月―八月の第七回大會開催以來、國際情勢の大變轉によつて大會開催の必要があつたにも拘らず其の事なくして適宜戰術を變更し、殊に今次大戰勃發後は殆ど否として音沙汰なく其の存在すら世人から疑はれ

てゐた際に、今回突如として世界未曾有の大動亂の最中に大會の開催もなかりてコミンテルンは解散するに至つた。其の創立以來正に二十五年の生涯である。勿論コミンテルン活殺の權はソ聯邦の掌握する所であり、コミンテルンそのものが既に有名無實化して實體すら失はれてゐる現状ではあるが、それにしても國際情勢上其の活動を最も必要とする時期に際しての其の解散はソ聯邦としては一大英斷と言はなければならぬ。然も之を敢て斷行したに就いては餘程の理由がなければならぬ。而して之を検討する場合我々はそれが一石二鳥三鳥の効果を狙つてゐることを發見すると共に、現實政治家たるスターリンの面目躍如たるを見るのである。

コミンテルン解散の理由に就いて、スターリンは五月二十八日ルーター通信莫斯科特派員キングの質問に對して、「コミンテルンの解散は正當であり時宜を得たものである。蓋し自由を愛する全民族を共同の敵獨逸に對して共同戦線を張らしめるに急なるが故である。コミンテルン解散の正當なる理由は次の通りである。

- 一、莫斯科が恰も外國の内部に干渉し、之をボルシェヴィキ化せんと企てゝゐると爲す獨逸のデマを曝露することとなり、今後かゝるデマは終熄するであらう。
 - 二、各國の共産黨が勞働運動を爲すに當つて恰も自國民の利益の爲めではなく、外國の指令によつて行動してゐるかの如き共産主義の敵の中傷を曝露することとなり、今後かゝる僞囑は終焉を告げるだらう。
 - 三、政黨、宗教を超越して、對ファシズム闘争展開の爲めに其の國の進歩主義勢力を渾然たる民族解放の陣營に統一せんとする愛國主義者の運動の負擔を軽減するものである。
 - 四、ヒトラーの世界制覇の脅威に對抗する爲め、自由を愛好する各國民を單一の國際陣營に統合し、以て權利の平等に立脚する今後の諸民族協力への途を開拓する愛國主義者の運動を容易ならしめる。
- 以上の諸條件は總て、對獨逸の爲めに聯合國及び其の他の諸民族の統一戦線を今後益々強化せしむるものと思ふ。余

がコミンテルンの解體が全く時宜に適した處置と斷言する理由は目下、ファシスト猛獸が全力を擧げて奮闘しつゝ、ある際、此の猛獸を徹底的に打倒しファシストの惡政から民族を解放する爲め、自由を愛する諸民族の共同強襲を組織することが肝要であるからである。」と答へたのである。

(四) コミンテルン解散の意義

コミンテルン解散の理由は勿論前に述べた其の解散決議になり、スターリンの回答に明かであるが、其の主要な政策的動機は他に在るものと言はなければならぬ。

抑々今次大戰に際して、英、米の三國が従來の行掛りを捨て、提携したのは各國夫々の立場から思惑があつてのことであつた。英、米側としては英、米兩者間に其の立場の相違はあるが、要するに相次ぐ自己の取返を挽回せんとして歐洲第二戦線の構成と物資援助によつてソ聯邦を自己の陣營に抱き込んだのである。之をソ聯邦側から言へば獨逸の急襲に對する戦局打開の爲めには英、米の力を借りざるを得ない實情にあつた。加之英、米、獨を嚙み合はせて其の疲弊を待つこともその傳來の方針であつたのである。ソ聯邦がコミンテルンをして歐洲第二戦線結成を叫びしめたのも此の爲めに他ならない。従つて此の三國提携の歩調が見角亂れ勝であつたのも亦當然である。例へば米國副大統領ウォーレスがソ聯邦はトロツキー主義を拋棄して米、英の基督教的民主主義を採ることに同意せよと聲明したことや、ソ聯邦が汎斯拉ヴ主義を宣傳してバルカン地方に對する野望を示唆し、或は大西洋憲章を無視して戦後バルト諸國に對する宗主權の掌握を宣言したことの如きそれである。又英、米は援ソ、或は對獨抗戦力の最高度の發揮を理由にソ聯邦の資源讓渡等を提議したと言はれ、ソ聯邦は英、米の物的援助を受けつゝも之を國民に秘密にし軍事上の情報交換をも拒否してゐると言はれて居る。斯るソ聯邦の態度は特に米國に不満を與へてゐる。更に又、ソ聯邦の要望する歐洲第二戦線結成間

題にしても其れが撓々しくないので他に色々理由はあらうが、英、米の立場としては取敢へず物的援助によつてソ聯邦を對獨戰に敗れない程度に戦はしめて、ソ聯邦が戦勝の結果歐洲に其の赤色勢力を強化することを極力避けなければならぬからである。されば此の問題についてはソ聯邦は昭和十六年（一九四一年）の十月革命記念祭に於けるスターリンの演説を始めあらゆる機會に之を取上げ、又英、米共産黨をして再三決議せしめたのである。それと共にソ聯邦は共産主義を好まぬ英、米兩國に對して既に述べた通り國內に於ける民主主義的諸方策の施行によつて自ら民主主義國なるかの如き印象を與へ其の懐柔に努力したのである。昭和十七年（一九四二年）の十月革命二十五周年記念日前夜のスターリンの演説に於ても英米ソ同盟の行動綱領を數々述べた中に「民主主義的自由の復興」を加へて居る。所詮、此の三國間の歩調の亂れ勝なのは其の思想的對立に基因するのである。

現に赤軍が今次冬期對獨反攻作戦に成功しソ聯邦の重壓が歐洲に迫つた時、英、米が其の世界赤化の危険に非常な恐怖を感じたことは周知の通りである。而してかゝる情勢はソ波紛争（カチンの森に於ける波蘭將校虐殺死體發覺事件）等と併せて獨逸に對して、本年二月初めのゲッペルス獨逸宣傳相の「歐洲赤化に對するボルシェヴィズムの脅威」と題する演説が中立國を始め世界各國に相當の影響を與へた如く其の防共宣傳上有利な地盤を提供し、延いては歐洲に於ける諸國民の反ソ運動を激發せしめるのみならず、羅馬カトリック教社會の反ソ的態度と共に英、米側の歐洲第二戰線結成をさなきだに躊躇せしめる外、更に世界赤化の脅威による反ソ氣運の醸成は總て交戰資本主義諸國間の和平締結氣運を濃化するとも限らない。勿論ソ聯邦は從來コミンテルンがソ聯邦とは無關係であるとの遁辭を以て世界赤化に就ての各國の非難に應酬して來たが、ソ聯邦と全聯邦共産黨とコミンテルンとが三位一體の關係に立つてゐることは夙に世界の熟知する所である。而して以上の如き反ソ的情勢を誘致することはソ聯邦擁護に動員して來たコミンテルン利用の企圖に反するばかりでなく、コミンテルンの存在自體がソ聯邦にとつて戦争遂行上却て有害無益となつたものと言はな

ければならない。前記スターリンのキングに對する回答は此の間の事情を卒直に物語つてゐるものと言ふべきである。即ちコミンテルンがソ聯邦にとつて有害無益の存在と化した事實こそコミンテルン解散の主要な政策的根據なのである。コミンテルンの解散は以上の如き政策的根據に基いて斷行された。而してソ聯邦は此の解散によつて、更に内に於ては學國一致體制の強化に資し、外に對しては反樞軸陣營との緊密化に基く早急な歐洲第二戰線の結成と戦争遂行資材の獲得とを容易ならしめると共に、樞軸陣營に於ける共同關爭目標の喪失に依る其の離間を策して以て戦勝を確保せんとしたものに他ならないのである。

即ち既に我々が見た通りソ聯邦は數次の五箇年計畫によつて高度國防國家體制を建設すると共に各種の方策を講じてスターリンの獨裁下に國民の愛國心を鼓吹し、殊に今次大戰勃發後は其の度は熾烈化して來たのである。洵にソ聯邦の運命を決すべき今次大戰に於ては國民の熾烈な抗戰意識、祖國愛に基く學國一致體制に依らなければ其の戦勝は不可能である。「全世界プロレタリアートの祖國を擁護せよ」とか「世界革命の爲めの戦争」の如きスローガンは少くとも非黨員、殊に赤軍の大部分を占める農民の心の琴線には觸れざるべく、「祖國ソ聯邦の名譽と自由並に獨立を死守せよ」とか「祖國防衛戦争」とか叫ぶことが全國民の民族意識を煽る所以である。ソ聯邦の實權は全聯邦共産黨の掌握する所であるが今や國難に面しては黨は狹隘化して黨員、非黨員の區別の如きは何等存在の意義がない。此の時期に於て有名無實化したコミンテルンの解散は國民の士氣統一に好影響を與ふるものであらう。此れを他の方面から觀察すれば數次に亘る矯正工作によつて反對派は影を潜めたこととは考へられるが往年のエスキゼの例に示されたが如くコミンテルンの世界赤化の妄想に囚はれたスターリン反對派の陰謀なきを保證し難い。コミンテルンの解散は夫等分子に對する據點を失はしむるものに他ならぬ。

次にソ聯邦の要望する歐洲第二戰線の結成と援ソ物資とが撓々しくないので理由は既に述べた所であるが、コミンテルン

の解散は英米が最も脅威を感じ且つ不満を抱いてゐる世界赤化の野望をソ聯邦が抛棄して愈々其の民主主義國家なるかの如き印象を濃化せしむるものであつて、少くとも其の障害の理由の一を除去したことになる。コミンテルンの解放は米國政府の強要によつてスターリンが譲歩したものであるとの説が行はれてゐるが、其の眞偽は別として其の發表の時期を米國大統領特使の莫斯科訪問直後に選んだ事實は興味深いものがある。而して此の解散の報傳は、英、米側に於て之を歓迎し、これによつて英、米、ソ間の協力は戦争遂行上は勿論戦後に於ても一層容易となり、樞軸國側の反共宣傳の基礎を失はしめ樞軸同盟の根柢を粉砕すべしと強調したことは、ソ聯邦の此の企圖の一半を果したものと云ふべきであらう。

更に防共協定の目標は今更事新しく説く迄もないが、コミンテルンの解散は其の共同闘争目標を失はしめて樞軸國の離間を策したものと云ふことが出来る。ソ聯邦が悪罵の限りを盡してゐるフアシスト獨逸は常にコミンテルンの歐洲に於ける脅威を叫んで來たのであり、又對ソ戦争目的を共產主義打倒による世界赤化の危険の除去に置いてゐるが、スターリンがルーター・莫斯科特派員に答へた如く其の戦争目標を失はしめることになるのである。殊に今冬以來ソ聯邦の冬期反攻が成功を着々と收めるや英、米が脅威を感じ、ゲツベルス獨逸宣傳相の演説は相當反響を呼んだのである。而してソ聯邦の世界赤化工作に對し警戒を怠らない世界各國間に反ソ氣運が濃化したと考へたソ聯邦はその氣運を打破するのみならず、世界の全力を擧げてフアシズム攻撃を行はしめ可及的速かに戦争を終結せしめんとしてコミンテルン解散を斷行したものと斷ぜざるを得ない筈があるのである。尙日本に關しては一言も觸れてゐないのは對日摩擦を避けんとするソ聯邦の意圖に従つたものであることは言ふ迄もない。

其の他、コミンテルンの解散はソ聯邦と防共樞軸陣營との妥協可能の道を閉塞、或は各國共產黨をして獨立した政黨として其の活動を容易ならしめるのみならず、莫斯科を中心として或は全聯邦共產黨を通じ、或は在外官憲を通じ、或

は未だ殘存してゐる國際的組織を通じ從來同様に策動を繼續するのに何等の支障のないことを考ふるときは其の解散は極めて巧妙なものがあると言はなくてはならない。

要之、コミンテルンの解散は現下の深刻な對獨逸遂行の必要上採つたソ聯邦一流の常套手段たることは勿論ではあるが、スターリンのイワソフへの回答に既に見られる如くこれによつて世界赤北の脅威は些かも軽減するものではないことに注意しなければならない。寧ろ其の解散は解散決議に於て述べてゐる通り「マルクス・レーニン主義創始者の教訓を指導精神となし未だ嘗て時代に適應しない組織的形式を嚴守したことのない共產黨員が偉大なマルクスが前衛労働者を國際労働者同盟に團結し次いで第二インターナショナルが歐米諸國に於ける労働黨發達の基礎を確立し其の歴史的使命を終へるや右は最早當時の國民労働黨結成の要請に適合しなかつたが故に之が解散を實現したことを想起」して爲されたものであつて、然も同決議は更に「コミンテルンに味方するものに對し、全力を擧げて勤勞者の不倶戴天の敵獨逸フランスム及び其の同盟國並に所屬國の連かな打倒の爲め、反ヒトラー同盟各國家及び各民族解放戦を全面的に支持し、これに積極的に参加することを呼掛け」てゐるのである。又スターリンのルーター特派員に對する回答も同様の趣旨を述べてゐるのであつて、「フアッシュヨに對する共同強硬」の實現の爲めの解散であつて見方によつては國際反フアッシュヨ戰線戰術の新なる展開とも見られる。之をコミンテルン解散に對する各國の見解に見ると、獨逸、伊樞軸國側のそれは別としても、之を政治的に取扱つて賛意を表した英、米に於てすら懷疑的態度を以て警戒を怠らない模様が取寄せられるし、公平な立場にある中立國筋に於ても今次の解散を以て、モツブル等類似組織について何等の措置が採られないのは奇怪至極であつて、英、米、ソ間の提携強化を策じたスターリンの欺瞞政策に過ぎず、今後各國共產黨は夫々獨自の立場に基いて益々深刻に且つ廣汎に其の活動を展開すべく警戒の要があると論じてゐるのである。現に米國共產黨は從前通りの立場を進めて行くと言はれ、英國共產黨は労働黨に合流を提議し、又中國共產黨はマルクス・レーニン主義を自

國の國情に基いて活用して民族の抗戰建國事業を達成する旨を決議したのである。而して確實なる情報に依ればソ聯邦は解散したコミンテルンの役割を全聯邦共産黨中央委員會内に新設された機關(外國課)をして行はしめることとし以て各國共産黨を指導して世界赤化の野望を實現せんと意圖してゐると言はれてゐる。此の事實は又同時に、假令如何なる術策を弄しようともコミンテルン利用の味を忘れる筈のないソ聯邦であつて見れば國際情勢の變化如何によつてはコミンテルンの再組織を行ふかも知れないことを示唆するものである。其の國是たるボルシェヴィズムを改めない限りはコミンテルンの解散によつてソ聯邦が世界赤化―赤色帝國主義の野望を拋棄したものと思ふ事は到底出來ない。我々は今後、所謂共産主義運動の動向に就いては深甚な注意と警戒とを拂はなければならぬのである。

第七章 コミンテルン二十五年の一考察

(一) ソ聯邦の宰相

大正八年(一九一九年)三月創立されて世界革命遂行の目的の下に活動を続けて来たコミンテルンは其の綱領に於て「ブルジョア革命が全世界に亘つて封建制度を一掃する迄には百年の歳月を必要とした。然しプロレタリア國際革命は前者に比し遙かに短年月で目的を達し得るものである」と規定しつつも、其の目的を達成せずして現下世界新秩序建設のきびしい戦の中に突如として二十五年の生涯を遂げることになつた。而して此の事實はコミンテルン創立の経緯、其の後の歩みを觀察した者にとつては決して偶然の出来事ではない。コミンテルンは解散すべくして解散したのである。その昔ノヴォロドの住民は當時彼等がワリヤトク人と呼んでゐたスエーデン人の許に使者を送つて「我が地は廣く豊かであるが秩序が無い。來つて君臨し我等を治めよ」と乞ふて戴いたのが露西亞歴史に現はれた最初の元首リューリクである。かくて八六二年に興つたと言はれる露西亞は其の後一三六六年以來二百五十年間欽察汗國の祖拔都及び其の

子孫によつて統治されたが、やがてリューリクの子孫のモスクワ大公が中心となつて之を追拂つてモスクワ朝が開け、ロマノフ王朝に移つた。タタールの支配は從來稠々に分立してゐた諸公を其の下に置いて封建的政治的組織を作り上げた。それがタタールの壓制と共に、本來露西亞特有の封建的土地制度の下に於ける領主、即ち大地主たる貴族の首長であつたツァールに遺産として引繼がれたのである。多數の異民族を傘下に舊式な專制政治が行はれ、人民は受動的に服従せしめられた。茲に國家と人民の乖離が生じた世界文化の中心西歐羅巴は直ぐ隣りである。農民の搾取の上に榮えた大地主たる貴族の子弟たる青年は西歐羅巴の思想に感染して行つた。封建的專制制度を完全に清算しきれない農業國たる露西亞に於て社會運動が土地問題を中心とする農民解放運動に向ふのは當然である。茲にナロードニキの運動が始まる。ツァールは專制君主として民衆の僅かな革新的要求をも抑壓して来た。露西亞國民就中農民のツァール政府に對する反亂は露西亞史の幾頁かを占めてゐるが殊に二十世紀に入つては工場労働者階級の發生と共に民衆の革命意識は愈々昂揚して来た。日露戦争の大敗は此の勢を煽つた。硬直した發展性の認められないロマノフ政治に對して國民が不満を感じ革命を求めたのは當然である。

而してかかる不安な國內事情は第一次世界大戦に於て遂に爆發し、露西亞共産黨は奇蹟な壓制と極度の窮乏とに一切の希望を失つた露西亞國民の心理を巧みに捉へて革命に成功した。

我々が露西亞革命を、然もレーニン自身すら其の成功を其の直前迄豫想しなかつた十月革命が露西亞共産黨によつて達成されたといふ事實に拘泥せず、其の本質のみを觀察するならば、此の革命はビョートル大帝によつて一應の形を整へた露西亞國家をば露西亞國民が、今や民族の宗家としてでなく單なる國家の所有者として封建的專制權力を形成して来たツァール及び其の一聯の貴族大地主及び大資本家の桎梏を脱して、歐米先進諸國に比肩し得る近代民族國家として甦生せしめるといふ點に其の歴史的意義を認めることが出来るのである。而して革命に成功した露西亞共産黨は露

西亞帝國崩壞の地盤に其の自ら抱持する理想社會の建設に邁進することになつたのであるが、かくして爾後ソ聯邦の二十數年の歴史を一貫して此の露西亞國民の民族國家的成長の意欲と露西亞共產黨の思想的目標とが矛盾對立を續けて流れることになつたのである。レーニンの新經濟政策への轉換もスターリン對トロツキの抗争も其の一事象に他ならぬ。

ソ聯邦は社會主義國家と言はれる。レーニンの死後スターリンはトロツキの永久革命論を葬つて一國社會主義建設に着手し、一意國力の増強と民族の統一へと邁進した。然しながらその所謂一國社會主義の實體は眞の意味の社會主義そのものではなく、實に露西亞特有の専制權力に率ゐられた國家資本主義そのものだつたのである。

抑々ソ聯邦が社會主義の成功を誇示する内に數字を以て示される農業の社會化がある。然しながら我々の注意しなげればならないことはその數字に示されたものは農業の大經營化―機械化であつてこれは必ずしも農業の社會主義化を意味するものではないことである。勿論農業の大經營化はソ聯邦の誇示する如く成功したであらうし、又其の意義は重大と謂はなければならぬ。蓋し經濟原則の教へることは合理的な大經營の有利なことであるからである。然のみならず此の大經營化は農産物の政府蒐荷を容易ならしめ、工業化の爲めに莫大な勞働力を生み出し、更に機械化は鈍重な農民をして機械に習熟せしめて現代の機械化による戦争に直に役立たしめ得ることとなるのである。然しながら其の合理的な大經營の恩恵を受けた農民はその收穫物を自由に市場で賣却して其の利益を相互に分配するのであるから農民の勞働を支配してゐるのは營利本能であつて社會主義の原理とは何等關係はない。即ち謂ふ所の農業の社會化は農業の社會主義化には至つてゐないのであつて、其の實體は資本主義に他ならないのである。

而して又同様のことが工業に就ても言ふことが出来る。勿論ソ聯邦が誇示する如く工業部門に於ける經濟建設の成功は事實の餘りにも明白に證明する所である。其の成功を齎らした理由は種々數々擧げることが出来る。土地廣く天然

資源の豊かなこと、重要な基本産業を國有として生産力の浪費を省き資本の再生産の爲めの蓄積を容易ならしめたことは勿論決定的なものであるが、更に國民が困苦欲乏に堪へ得ること、勞働力が豊富なりしこと、工業の未發達が却て歐米の近代技術を廣汎に採用し得たこと等も其の理由として擧げ得られる。従つて工業建設の成功を單に社會主義體制の優越性のみ歸することは出来ないであつて、然も其の實體は國家資本主義に他ならないのである。ソ聯邦に於ては資本主義國とは異つて大部分の工業は國有であるが、その國有工業の經營は國家機關の掌握する所であつて、勞働者は事實上何等これに參制してゐない。即ち勞働者は單なる賃銀勞働者であつて雇主が資本主義國のそれと異なるだけである。更に總ての事業の經營は採算主義―營利主義に基いてゐる。勞働賃銀は出來高拂制が採用され、更にスターリン運動は所謂勞働貴族を生み出して來た。其の反面所謂勞働の搾取が國家の名に於て行はれてゐるのである。

かくてソ聯邦は農業の大部分をも含む全産業を擧げて老大なトラストと化した最も典型的な國家資本主義の國家に過ぎないのである。現に昭和十年(一九三五年)十月六日付ブラウダ紙上に於て財政人民委員グリニコは食料切符制度廢止に關して「これは貨幣によるソヴェート經濟の新段階を意味するものであり、今後ソヴェート經濟は純然たる商業並に貨幣經濟に入ることとなつた」と述べてゐる。

遮莫、ソ聯邦はスターリンの一國社會主義の強行によつて興隆を告げた。即ちスターリンは社會主義のお題目の下に其の鐵の如き獨裁の威力によつて露西亞の歴史始まつて以來專制政治に慣れた露西亞民衆を威し嚇しつビョートル大帝によつて築かれた老大な版圖をば計畫經濟に基く近代工業化と集團農業化なる強固な經濟的基礎の上に結合統一すると共に重工業を中心として後進國露西亞を引上げて一擧にして先進國に伍する近代的高度國防國家體制を建設したのである。而してかかる經濟建設はスターリンの獨裁の下に外界から遮斷され一切の批判の自由を奪はれてゐる露西亞國民にとつては大なる驚異であり、やがてそれは自國への誇となつたであらうし、又國內建設に國民を激勵するに常に對外危

機を以てしたことは自然と民心に祖國防衛思想を植付けたのである。外部からの壓力が内部の團結を鞏固ならしめることは社會法則の教ふる所である。此の過程は當然階級的國際主義の褪色を伴つた。此の動かし難い國民の實相に直面してやがて現實と理想の矛盾の中に疑惑と動搖を續けてゐた革命の闘士が次第に葬られて行つたのも當然である。従つて其の後は、殊にソ聯邦の戦時體制化と共に、最早プロレタリア階級意識の昂揚ではなく、祖國の危機の叫びと共に祖國の防衛とスターリン政權への忠誠が強調されて、此の國家主義的傾向は益々發展し、遂には抹殺されてゐた露西亞革命以前の帝政露西亞の歴史を復活してソウェイト國家が露西亞民族の歴史の傳統の上に發展して來たことを説くに至つたのである。かくてソ聯邦はビョートル大帝の再現者としてのスターリンといふ露西亞特有の專制權力者の下に國民の政治的統一を遂げるに至つたのである。

茲に於て我々の知ることは、此のソ聯邦の歴史的過程こそは、所謂ボルシェヴィズムが政權の奪取には成功したものの露西亞の民族社會の現實の地盤に直而して其の非現實性を曝露し、國民の民族國家的成長の意慾を前にして先覺者、スターリンの指導の下に其の理論の修正を行ひつつ先進各國に比肩し得る露西亞民族の近代的國家的統一を成就したといふことである。而も昭和十三年（一九三八年）の革命二十一年記念日の演説でモロトフは「資本主義的環壁の條件に於ては社會主義國家の死滅が問題ではなく、階級の敵特にソ聯邦の領土外にあつてなほ打倒されない階級敵からの打撃を破る力が問題なのである。現在の條件にあつては問題はソウェイト國家の死滅に存するのではなく、我が國の力を強化しボルシェヴィキ的に組織された強力な社會主義國家を持つことに存する」と述べてゐる。即ち資本主義を克服して社會主義體制を確立したとされるソ聯邦の實體は凡ゆるボルシェヴィキ的表現にも拘らず強度な專制權力に率ゐられた近代的帝國主義國家であるといふことである。帝國主義とは資本主義の最後の段階であると定義されてゐる。ソ聯邦は紛れもない國家資本主義國である。平和政策を掲げては居るが、外蒙に臨んだ態度、更に獨ソ提携以後の其の行動は純

然たる赤裸々な帝國主義に他ならない。されば獨ソ戦下、ソ聯邦に再び汎スラヴ主義が新しい宗教政策と共に姿を現はすに至つたのも決して偶然の出來事ではないのである。

(三) コミンテルン二十五年の一考察

既に述べた如く革命に成功して資本主義國家との共存共榮を明白に否定した宣言を發した露西亞共産黨は内外の敵に對して革命政權を守る爲めに歐洲のみならず世界に革命政權の成立の可能性を期待し、且つ其の爲めに必死の努力を拂つたのであつた。コミンテルンは實に此の目的の爲めに創立されたものである然しながら露西亞共産黨の、従つてコミンテルンの指導理念たる所謂共産主義即ちボルシェヴィズムは元來その創始者たるレーニンの指導下に革命前の特有な露西亞社會を基盤として發生し、發展を遂げたものであつて、之を國情の異なる諸外國に適用せんと試みたことに無理があつた。

例へば三二年テーゼと言はれてゐる昭和七年（一九三二年）五月コミンテルン西歐事務局が發表した「日本に於ける情勢並に日本共産黨の任務に關するテーゼ」に於ては我國の君主制に就て「この君主制は、一方には主として寄生蟲的封建階級たる大地主に依存し、又他方には急速に富みつつある貧乏なブルジョアジーに依存し、之等の階級の上層と最も緊密な永続的同盟に立ち、此の兩階級の利益を可成柔順に代表しつつ、同時に、其の相對的に重大な獨自の役割と、又似て非なる立憲的形式に依つて辛うじて隠蔽されてゐるに過ぎないその專制的本質とを保持してゐる」と規定したのである。此の規定は誠に畏多きことながら暴露極まるものであつて國情の異なる我國に對しボルシェヴィズムのツアールに對する分析をその儘當嵌めんとしたものに他ならないことは明瞭であつてボルシェヴィズムそのものが露西亞特有のものであることを端的に曝露したものである。されば其の運動は國情の異なる各國に於て一時は露西亞に於ける新ソヴェート共和國の出現に各國共産主義者が刺戟せられて活況を呈したものの、纏て何れも失敗に歸するに至つたのは當然と

言ふべきである。

かゝる内にソ連邦は當面世界革命による外部からの救援が期待し得ない現實に直面してスターリンの「一國社會主義に依る建設事業に着手した。此の事は世界革命に依る國際プロレタリアートの救援を斷念したものであると共に他面、列國との國際協調を必要ならしめた。従つて元來がソ連邦の爲めに創立され、然も其の指導的指部たる全聯邦共產黨—ソ連邦の政策に左右されて來たコミンテルンはソ連邦にとつて命や不利益を齎す世界革命運動の機能を事實上放棄せざるを得ない破目に陥つて來たのである。さればジノヴィエフを始めボルシェヴィズムの理論に従つて世界革命の使命に忠實な革命家が漸次コミンテルン陣營から悪罵を以て葬り去られて行つたのである。然しながらスターリンは世界革命を斷念はしたが此のコミンテルンの看板をば賢明にも利用して、其の下に集る各國の共產黨員をば不相變、革命的言辭と財的援助とによつて煽動しつゝ、彼等にソ連邦擁護の任務を與へてソ連邦の爲めに各國の國內擾亂や謀報謀略活動を行はしめて來たのである。茲に於てコミンテルンは愈々明白に、一國社會主義の名の下に其の實既に述べた通り露西亞特有の強度な專制權力に率ゐられた國家資本主義國たるソ連邦の、其の赤色帝國主義野望實現の忠實な手足たることを露呈して來たのである。

而して此の事實は其の革命的言辭にも拘らず、當然コミンテルンの世界革命遂行に對する熱意の喪失に現はれて、各國に於ける革命運動は其の指導の非現實性と共に失敗を繰返すに至つた。又、他面新生の社會主義國ソ連邦と黨の指導下に在るコミンテルンに對して皆て盲目的に崇敬の念を捧げ來つた各國のプロレタリアートが自己の享受してゐる高度な文明の恩恵と對比して黨の一國社會主義の實相に幻影を破られたことは、革命の失敗と併せて、彼等のコミンテルンに對する熱情を冷却せしむるに至り、コミンテルンは衰退の一路を辿るに至つたのである。

爾後、コミンテルンは世界に澎湃として興つて來た國家主義の風潮を前にして、只管ソ連邦の對外政策變更に追隨し

て其の戰術を豹變しつゝソ連邦擁護に専念し、猶まだ共產主義の美名の下に集る各國共產黨を煽動してソ連邦の内外政策遂行の爲めに大なる寄與を爲して來たのである。例へば赤色西班牙政權の援助にしても獨逸をそれに釘付けにして自國の安全と興隆とを圖つたものであつた。然しその反面、第七回大會決議の反ファシズム人民戰線戰術は一瞬其の起死回生の役割を果たしたものの、コミンテルンそのものは高く掲げられた防共のスローガンを前にして愈々衰亡の姿を露したるのである。殊にソ連自身が漸次世界新秩序建設といふ新時代誕生の深刻な試練の前に直面させられるに至つては、コミンテルンに對する其のソ連擁護の指導にすら熱意を喪失したのみならず、コミンテルン自體がソ連邦にとつて有害無益の存在と化するに至つた。かくしてコミンテルンは遂にソ連擁護の爲めに、既に米國共產黨のコミンテルン脱退が先臨的役割を果たした其の解散を斷行するに至つたのである。嘗て大正十四年（一九二五年）十二月露西亞共產黨第十四回大會は其の世界政策綱領に於てレーニンの豫見を全面的に承認して「社會主義國と資本主義國とは到底長く兩立し得ない、結局その何れかの勝利に歸するであらうといふ事はレーニン主義の鐵則であつて動かす事を許さない」と規定した其の戰である獨ソ戰の最中、其の活動を最も必要とすべき其の時期に際會しながら、ソ連邦の爲めに創立されたコミンテルンがソ連邦の爲めに解散せざるを得ざるに至つたとは誠に皮肉な歴史的事實と言はなければならぬ。抑々露西亞革命に成功したソヴェト政權の指導者は資本主義國家と袂別してボルシェヴィズムの實踐に邁進し、近代資本主義社會が内包する一切の政治的、經濟的、社會的諸矛盾を克服し近代社會の終焉を意圖する新社會の建設を世界的規模に於て世界革命を通じて實現せんと企圖した。然しながらボルシェヴィズムは既に述べた通り未開の後進國たる露西亞特有の基盤の上に發生し發展を遂げたものであつて、一見科學的社會主義として觀念的には其の近代資本主義社會の分析に於て極めて科學的に精緻なるかの如き印象を與へたのであつたが、其の現實に於けるコミンテルンを通じての世界革命に於ける實踐の結果は其の非現實性を曝露して失敗を重ねたのであつて、其の指導者をして世界革命の企

圖を一應拋棄せざるを得ざらしめるに至つた。茲に於て既にボルシェヴィズムは新社會建設の指導精神たる資格を喪失したものと云ふべきである。然るにソ聯邦に於て一國社會主義の名の下に世界に比を見ない強度な專制權力に率ゐられた高度な帝國主義的國家資本主義の國家を建設したボルシェヴィズムのお題目をばソ聯邦の專制權力者はソ聯邦擁護に利用したのである。換言すればコミンテルンは赤色帝國主義國ソ聯邦の思想謀略機關たる本質を前面に露呈したのであつた。而して爾後のコミンテルンを通じてのボルシェヴィズムの實踐は各國に興つた國家主義思潮を前にしての苦悶の歴史であつて其の反撃に到底堪え得ざることを示したのである。結局ボルシェヴィズムはソ聯邦に於ける其の實踐が示した如く個人主義思想の地盤からは脱却し得なかつたのであつて、今次世界が新秩序建設の激動の中に突入するやまびしい戦の嚴肅な審判の前に立たされる運命に達着して愈々其の思想の脆弱性を曝露したのである。

思ふに今次世界大戦は大東亞戦争を通じて廢國の理想に基き亞細亞諸民族との道義的協力の内に東亞の平和的新秩序の完成に邁進する皇國日本を中心とする輻輳陣營が主體となつて第一次世界大戦の結果激化せしむるに至つた個人主義を基調とする世界に於ける英米帝國主義的支配體制の矛盾と其の極格下に呻吟する諸民族の苦悶の姿を解決せんとする重大な歴史的使命を有してゐるのである。而してスターリンは今次世界大戦を規定するに、一國の運命を賭する深刻な大戦争の渦中に投ぜられて燃え上つた各國民の強い國家感情乃至民族感情の前に屈して、國家の對立關係の解決を階級闘争の世界觀に基く階級的國際主義に求める態度を採らずして、ファシスト獨逸の侵略に對する祖國防衛戦争或は民族の自由と獨立との擁護の戦争であると規定したのであつた。此れは即ちコミンテルンが其の戰術を人民戰線から國民の解放と獨立との爲めの闘争といふ汎國民戰線に轉換した事實と併せて、ボルシェヴィズムが現代世界の苦悶の解決者に非ずしてきびしい戦の試練の後に新しく生れ出づべき世界新秩序の指導理念たり得ないことの告白に他ならない。畢竟、ソ聯邦の思想謀略たるお題目が世界に其の本質を曝露したものであつて、コミンテルンの解散はボルシェヴィズムの破

産を宣告したものととして、かゝる意味に於て理解され得るであらう。

要之、コミンテルンはソ聯邦の恐るべき赤色帝國主義國家建設の重大な一翼を擔當し其れに寄與して來たのであつた。洵にボルシェヴィズムなる理論によつて巧に仕組まれた恐るべき思想謀略と言ふべきである。而してコミンテルンの、従つて又ボルシェヴィズムの、かゝる實體を究めるに於ては、萬邦無比なる我國體に生を享けて今や大東亞共榮圈建設に奮戦を戦ひつゝ世界新秩序の樹立に參劃しつゝある我等皇國民にして、かゝる思想謀略の虜となつて其の害毒に犯さるゝ者一人として無き事は我々の深く確信して止まない所である。(終)



